

(7) 奥原碧雲旧蔵資料について

升田 優

はじめに

奥原碧雲（本名福市）は、明治 39 年 3 月の島根県竹島調査団に同行し、その報告書『竹島及鬱陵島』を著すなど、明治 38 年に島根県に編入された「竹島」認識に大きな役割を果たしてきた。以後、今日に至るまで、『竹島及鬱陵島』は竹島研究者が明治期の竹島を語るときには必ず引用される必須資料となっている。戦後、いわゆる竹島の領有権問題が発生した際にも、各研究者は碧雲の資料を研究し、竹島問題についての論拠としてきた。

平成 17 年の島根県の「竹島の日」条例の制定を機に、島根県が設置した竹島問題研究会においても、新たな資料の発掘のため、平成 18 年に奥原家（三男秀夫氏）での資料調査を行い、碧雲が記した『竹島経営者中井養三郎氏立志伝』という新資料の提供を受けた。その際、他には竹島関係の資料はないとの秀夫氏の話であった。

その後 20 年近く経ってから、本レポートに記すような経過で、新たな資料に出会うことになった。この新資料との出会いは偶然の賜であったが、地道に調査活動が続けたことによって得られた結果とも言える。そして、それは「竹島の日」条例が制定されたから、とも言える。

このレポートでは、新資料発見に至った経過とその概要を報告したい。

第一部 碧雲旧蔵資料の発掘

（令和 4 年 9 月）

1. 碧雲旧蔵資料との出会い

奥原碧雲の三男である奥原秀夫氏から当時の島根県立島根女子短期大学に平成 10 年に寄贈された資料（以下「碧雲旧蔵資料」という。）との出会いは、次のような経緯による。

①『観聴随筆』の異本調査

令和 2 年秋頃から、竹島関係調査の一環として、島根大学法文学部船杉力修先生に協力して、石見地域において浜田藩の儒学者中川顕允の記した『石見外記』に関する調査を行っていたが、その文献調査の際に、併せて、18 世紀初頭の石見地域におけるいわゆる抜荷事件を記した『観聴随筆』についても調査を行った。

これは、碧雲が『竹島及鬱陵島』を編輯する際に参照したと思われる『観聴随筆』の異本の調査を行うもので、この確認が課題となっていたが、石見地域ではこの異本の存在が確認されないため、碧雲の蔵書関係の新たな調査が必要となっていたものである。（参考 1）

②奥原家の資料調査

一方、奥原碧雲の資料は秀夫氏が保管されていることが判明したため、島根県竹島問題研究会等において、これまで何回か資料調査等が行われてきた。（参考 2）

しかしながら、これら一連の資料の中には、『観聴随筆』関係の資料は見あたらないため、令和3年の初め、奥原家の事情に詳しい福田正明島根県議会議員（竹島領土権確立島根県議会議員連盟会長）にお会いした際に、そのあたりの事情をお尋ねしたところ、「それは大学に寄贈されたはず」との示唆をいただき、県総務課を通じて島根県立大学松江キャンパスに確認をお願いした。

③碧雲旧蔵資料の調査

令和3年の春、県総務課を通じて同キャンパスの図書館に碧雲旧蔵資料が所在するとの連絡があり、同年の5月から6月にかけて、碧雲旧蔵資料の調査を行ったものである。

2. 碧雲旧蔵資料の概要

- (1) 本資料は、碧雲の三男である奥原秀夫氏から島根県立島根女子短期大学に寄贈されたもので、平成10年に、当時の附属図書館長であった寺本喜徳教授が整理され、現在同図書館で保管されている。（参考3）

＊奥原碧雲 明治6年（1873）～昭和10年（1935） 自宅で死去（63歳）

明治39年に県の竹島調査団に参加し『竹島及鬱陵島』を著す

- (2) 竹島関連の資料は、主に書籍等、草稿等、新聞記事等に大別されるが、その多くが竹島が明治38年に島根県に編入された直後のものであり、その主な著作である『竹島及鬱陵島』をはじめ「竹島」の定着化に大きな役割を果たしてきたと考えられ、その経年的な分析が期待される。

また、資料の多くは島根県立図書館にも収蔵されていないなど、貴重なものが多い。（資料1）

- (3) 新聞記事の切抜帖（以下「碧雲切抜帖」という。）の写しについては、従来田村清三郎の資料などにより知られていた「山陰新聞」の記事ではなく、「松陽新報」の記事がスクラップされており、比較検討が期待される。

3. 今後の調査・分析の進め方

- (1) 書籍等の内容について、比較検討と経年的な分析、また草稿等との比較

- (2) 碧雲切抜帖の内容確認と分析、データ化

①県立図書館所蔵の松陽新聞記事との照合

②明治39年の島根県竹島調査団の関係資料比較（資料2）

- ・碧雲著『竹島及鬱陵島』
- ・東文輔隠岐島司の竹島調査復命書
- ・田村資料にまとめられている山陰新聞記事
- ・碧雲切抜帖にある松陽新報記事

(参考 1) * 『観聴随筆』にまつわる記述

『観聴随筆』は、現大田市波根町の加藤三右衛門が、江戸時代の万治元年(1658)から享保 12 年(1727)までの出来事を日記風に遺した記録

- ・奥原碧雲の『竹島及鬱陵島』に、「加藤某の記せる観聴随筆によれば、享保 8 年(西暦 1723 年)6 月 21 日、大坂町奉行北條安房守、鈴木飛驒守の与力同心多勢来りて、石州安濃郡羽根東村嘉右衛、邑智郡粕淵村庄右衛門、同吾郷村傳右衛門を搦め捕へ去る、これ七年前竹島に渡りて、唐人の貨物を密かに買ひ取りたる罪によりてなりと見ゆ」とある。
- ・一方、田村清三郎の『島根県竹島の新研究(昭和 40 年 11 月)』には、碧雲の記述を引用しつつも、「この事件は、奥原碧雲の引用した観聴随筆の異本(寧しろ原本)である加藤三右衛門著の観聴随筆一名石見国安濃羽根東村覚書第二・三巻に、次のようにあることを正確としなければならないが、この当時、竹島渡海が禁制であることが石見地方においても周知せられていたことと、同時に竹島渡海が事実上行われていたことを示すものといえよう」とし、『観聴随筆』の記述「七年以前西年ニ当国へ来ル唐船ノ荷物」を正確としている。
- ・なお、同じく田村清三郎による演習資料『竹島問題の研究(昭和 30 年 5 月)』には、上記の課題について「そのいずれを正しとするかは更に研究を要する」としており、碧雲が参照したと思われる『観聴随筆』の異本の確認が課題となっていた。

(参考 2) * 奥原家に係る資料調査

- ・平成 18 年 10 月に研究会メンバーで奥原宅を訪問し、秀夫氏と面談。『竹島経営者中井養三郎氏立志伝』の存在を確認。その後、塚本孝先生がこの資料に基づき、研究レポート「奥原碧雲竹島関係資料(奥原秀夫所蔵)をめぐって」を『「竹島問題に関する調査研究」最終報告書(第 1 期)』(平成 19 年 3 月)に報告されている。
- ・奥原秀夫氏から島根県に、『竹島経営者中井養三郎氏立志伝』など竹島関係資料を寄贈
- ・平成 26 年に松江市史料編纂室から島根県に、竹島関係資料を提供

(参考 3) * 碧雲旧蔵資料の入手の経緯

島根県立大学短期大学部寺本喜徳名誉教授の話(令和 4 年 7 月 1 日)

- 「・奥原碧雲のことは、与謝野鉄幹、晶子の「明星」、浪漫主義との交流などは知っていたが、奥原家とは直接関わりはなかった。ところが、退職(平成 10 年度)の 5~6 年前に、読売新聞松江支局から問い合わせがあり、奥原家に資料があるかと思い、はじめて訪ねていった。そのとき秀夫氏と会った。
- ・その後、資料調査などで、数年間週に 1 回くらいのペースで通った。

母屋 2 階に碧雲の部屋があり、四方本棚に囲まれていた。その部屋に新聞の切り抜き帳が何十冊も積まれていた。そうした中で、台所にあった和筆笥に未整理の資料がたくさん入っていたので、主にその整理と、保存、管理に当たった。

- ・新聞の切り抜きは、スクラップブックに張られていたが、新聞によっては劣化していたものもあったので、少しずつ借りては大学の図書館でコピーして返却する作業を、2 年間くらい続けた。それを数年間で学生たちに記事の一覧表（索引）を作成させた。切り抜きにある手書きでの日付の記載は、碧雲のものだと思う。竹島関係の新聞記事などが多かったのは、碧雲が関心を持っていたためではないか。
- ・碧雲が収集した資料は、軸物や色紙など文化的価値のあるもの、文芸関係のもの、竹島を含めて郷土史的なものなど極めて多岐にわたっていた。そのうち、自分が平成 10 年に秀夫さんから寄贈を受けたのは、自分が整理に携わった台所和筆笥の資料など一部に過ぎない。文芸関係は当時整理したものを図書館に展示したりした。
- ・碧雲旧蔵資料のなかで竹島関係のものは、当時あまり関心がある分野ではなかったので、索引等の作成のみで、資料そのものは読み込んでいない。また、公開等もしたことはない。以上 」

(資料1) 碧雲旧蔵資料一覧

書 籍 等				
書名等	発行年月日	編者・著者	発行所	竹島関連記述等
奥原碧雲蔵 明治・大正期新聞切抜帖（碧雲切抜帖）の写し		奥原碧雲		明治35年から昭和4年まで18冊の切抜帖を複写したもの。明治38年、39年の竹島関連記事が多数
日本海大海戦 ＊詩歌集	明治39年5月25日	奥原碧雲		
八束美譚	明治40年5月28日	八束郡教育会 編纂委員 奥原福市	報光社	
訂正増補 島根縣名勝誌	明治41年7月3日 （初版39年9月）	奥原碧雲編	有田有斐堂蔵版 有田傳助 （松江市末次本町）	本文＝「竹島（たけしま）」として1頁余りで紹介。附録に「竹島渡航日記（抄録）」を3頁にわたり収録
山陰名勝唱歌 第一編	明治41年7月15日	奥原碧雲作歌	報光社	
島根縣遊覧案内	明治41年8月	奥原碧雲編	松江川岡書店	碧雲緒言の中に「竹島」に言及。隠岐国全図に「桂島」の表示。本文＝「竹島」として、写真付きで1頁余りで紹介。名勝詩歌の中に「竹島をよめる」和歌を2首収録
山陰名勝唱歌 第二編	明治42年3月10日	奥原碧雲作歌	報光社	
嶋根縣案内	明治43年4月15日	島根縣協賛会	鯉沼巖	本文＝「竹島」として4行で紹介し、和歌を2首収録
山陰鐵道名勝案内	明治45年5月3日	奥原碧雲編	有田有斐堂 有田傳助	本文＝「竹島」として4行で紹介
島根縣産業案内	明治45年5月22日	島根縣内務部	島根縣内務部	本文＝「竹島」について、写真付きで5行にわたって紹介。島根県略図に「竹島」の表示（注；いわゆる桂島の位置）
八束郡名勝誌	明治45年6月1日	八束郡教育会 編集委員 奥原福市	報光社	
島根縣名勝案内	大正10年4月15日	奥原碧雲著	有田有斐堂 有田傳助	「竹島」の写真1葉を収録（日本海中無人島 著者撮影）の注。本文＝「竹島（たけしま）」として、1頁で紹介
全山陰誌抜萃 神国 出雲案内	大正13年4月5日	全山陰誌刊行会 代表者 奥原碧雲	愛隣社出版部	

島根縣案内	大正13年4月10日	島根縣	島根縣	本文＝[竹島]について、写真付きで4行にわたって紹介。島根県全図の[島根県行政区画]に「竹島」の表示
全山陰誌 西部編	大正13年11月15日	全山陰誌刊行会 代表者 奥原碧雲	愛隣社出版部	
島根縣案内	昭和4年4月1日	島根縣	島根縣	本文＝[竹島]について記載なし。島根県全図の[島根県行政区画]に「竹島」の表示
民謡と旧蹟の出雲 松江及郊外篇	昭和4年10月25日	福田正	松江市昭和町 水郷社	
島根めぐり	昭和6年2月1日	島根観光協会(島根縣庁商工課内)	島根観光協会	本文＝[竹島]について2行で紹介
修正原本 島根めぐり		島根観光協会(島根縣庁商工課内)	島根観光協会	本文中挿入図「隠岐國略図」に「竹島」の表示。本文＝[竹島]について2行で紹介
郷土 島根縣図書解題	昭和8年7月12日	島根県教育会		

(資料2) 碧雲切抜帖(写し)と田村清三郎資料の比較 ※年月日は略して表記

碧雲切抜帖(写し) *松陽新報 (主に竹島関係を掲載)	田村資料 *山陰新聞
1. 切抜帖 No1 (M35) 2. 切抜帖 No2 (M36) 3. 切抜帖 No3 (M36.12～M38.1) 4. 切抜帖 No4 (M38.3～M38.10) ・(不明)日本海海戦に関する記事(日本) ・M38.6.1「リアンコルド岩付近に於て」 ・M38.7.1「再び竹島に就て」 ・(不明)「竹島の名は猶疑問なり」 ・M38.7.26「竹島出漁談」(*中井養三郎)	・M27.1.14「漁船改良丸の好果」 ・M27.2.18「朝鮮竹島探検」 ・M38.2.24「隠岐の新島」 ・M38.2.25「小絃」 ・M38.6.6「竹島の視察」 ・M38.6.19「杜鵑声々」 ・M38.6.24「竹島海驢狼の消息」 ・M38.7.3「開戦記念絵葉書」 ・M38.7.14「絵葉書通信 品川漁翁」 ・M38.7.14「竹島視察員に就て」 ・M38.7.15「竹島視察準備」 ・M38.8.5「竹島探検」 ・M38.8.6「竹島渡航」 ・M38.8.16「隠岐国通信 13日」 ・M38.8.18「竹島行期日」

・ M38. 8. 22 「竹島視察談」 (* 松永知事) ・ (不明) 「竹島視察談(続)」 ・ M38. 9. 30 「韓国竹島の漁業」 (韓国竹島(かんこくちくとう)に集航する日本漁船の数は年々歳々に増加し * 山陰) 5. 切抜帖 No5 (M39. 1~M39. 6) ・ M39. 6. 19 「竹島領土編入沿革(三)」 注) その(一)(二)は欠号 ・ M39. 6. 20 「竹島領土編入沿革(四)」 6. 切抜帖 No6 (M39. 3~M39. 12) ・ M39. 3 「隠岐より(一)(三)(四)(吉田生)」 注) その(二)は欠号 「竹島視察の経過」 「竹島の海驢(みち)(一)(二)(三) (特派記者)」 「竹島の話(一)(二)(三)(特派記者)」 「蹴波記(一)(二)(三)(四)(五)(六)(七) (八)春風萬里生」 ・ M39. 4. 14 「鬱陵島見聞記(一)渡航記者」 ・ (不明) 「鬱陵島見聞記(二)渡航記者」 ・ M39. 4. 16 「鬱陵島見聞記(三)渡航記者」 ・ M39. 4. 17 「鬱陵島見聞記(四)渡航記者」 ・ (不明) 「鬱陵島見聞記(五)渡航記者」 ・ (不明) 「鬱陵島の森林の現況(岡県技手談)」 ・ 「満韓通信(奥原碧雲。第 46 信まで)」 7. 切抜帖 No 7 (M40. 3~M41. 5) 8. 切抜帖 No 8 (M42~M43) 9. 切抜帖 No 9 (M43. 11~M45. 6) 10. 切抜帖 No10 (T2~T3) ・ T3. 2. 11 教育功労者選奨 (* 奥原福市) 11. 切抜帖 No11 (T3~T4) ・ 隠岐騒擾に関する史料(奥原碧雲。上下) ・ 御大礼奉祝唱歌 (* 奥原碧雲 松陽) 12. 切抜帖 No12 (T5) 13. 切抜帖 No13 (T6~T7) 14. 切抜帖 No14 (T7~T9) ・ 西比利亞通信(第 25 報まで 奥原碧雲) 15. 切抜帖 No15 (T9~T11) 16. 切抜帖 No16 (T12) 17. 切抜帖 No17 (T15~S3) 18. 切抜帖 No18 (S3~S4)	・ M38. 8. 22 「松永知事の竹島視察」 「県庁内に海豚放養」 ・ M38. 8. 23 「県庁内放養の海鹿」 ・ M38. 8. 30 「隠岐通信」 ・ M38. 9. 5 「剥製の海驢」 ・ M38. 9. 30 「韓国竹島の漁業」 ・ M38. 10. 3 「竹島探検の事」 ・ M39. 3. 11 「竹島行決定」 ・ M39. 3. 14 「竹島視察の事」 ・ M39. 3. 16 「竹島渡航案内者」 ・ M39. 3. 23 「竹島渡航の予定」 「東隠岐島司」 ・ M39. 3. 24 「竹島渡航延期」 「竹島渡航一行」 ・ M39. 3. 27 「竹島渡航延期」 ・ M39. 3. 28 「竹島一行消息」 ・ M39. 3. 31 「竹島一行西郷出発」 ・ M39. 4. 1 「竹島土産」 ・ M39. 4. 3 「竹島渡航日記(1)旅行者某生」 ・ M39. 4. 6 「竹島渡航日記(2)旅行者某生」 ・ M39. 4. 8 「竹島渡航日記(3)旅行者某生」 ・ M39. 4. 10 「竹島渡航日記(4)旅行者某生」 ・ M39. 4. 12 「竹島渡航日記(5)旅行者某生」 ・ M39. 4. 18~4. 22 「鬱陵島の話 渡航者某生」 ・ M39. 5. 23 「懇親会」 ・ M39. 6. 7 「竹島報告書脱稿」
--	--

第二部 碧雲切抜帖を追って

—「竹島」に関する明治期の新聞報道—

(令和5年7月)

1. 島根における新聞概略

(1) 発刊当時（明治期）の状況

- ・現在の山陰中央新報社の社史によれば、社の沿革として、明治15年5月1日創刊の「山陰新聞」と、明治34年11月3日創刊の「松陽新報」となっている。
- ・山陰新聞の誕生について、「明治15年5月1日、山陰新聞の第一号が松江で発刊される。山陰中央新報の前身の一つで、これが本紙の歴史の第一歩となった。島根県では、それまでにいくつかの新聞が発刊されていたが、タブロイド判4ページの隔日刊ながら、定時刊行をうたった県内で初めての新聞らしい新聞であった」と記されている。
- ・一方、松陽新報の発刊については、「明治34年（1901）11月3日、二十世紀最初の当時の天長節は、わが社にとっても同15年5月1日と並んで記念すべき日だ。山陰新聞とともに本紙の前身である松陽新報が、この日創刊されたのである。明治十年代以降松江で三回の新聞発刊に参画しながら、いずれも志を得なかった岡崎運兵衛が、満を持して創刊にこぎつけたものであった」と記す。
- ・明治期に松江市内に建てられた代表的な西洋建築の一つが殿町の現山陰中央ビルの位置に、明治42年4月に完成した松陽新報社の社屋である。昭和39年に本社が袖師町に移転するまで55年間、幾度かの増改築を加えながら「殿町の新聞社」として親しまれた。

(2) その後の新聞事情

- ・山陰新聞については、「大正以来、構造的に経営難が続いていた山陰新聞は、昭和に入ると早々の金融恐慌、それに続く世界的経済恐慌もあって、さらに苦しくなっていた」、「経営難の原因について、差し当たっての病弊は集金の不良であった。たとえ収支のバランスは保っても現金不足はどうすることもできなかった。焦げ付きの未収金が多く、これは容易に取り立てられるものではなかった。広告も同様であった。日々の紙面を埋めるためにロハ（無料）の広告がどんなに沢山載っていたことか。山陰新聞は印刷も悪く、都会地の広告主が一県一紙を選んで広告を出すとなれば、必ず松陽が選ばれた」という。
- ・一方松陽新報社は日露戦争中から急速に発展、明治40年の決算で純益約七千円を上げた。岡崎社主は「新聞社も手狭になっている。これで新しい社屋を建てよう」と即断。早速新社屋建設の準備にかかるよう指示した。

松陽新報社屋について「この西洋建築の社屋が出現したとき、市民はアッと驚いた。なぜ目を見張ったか。それは当時の周辺のたたずまいを知れば容易にうなずけよう。例えば石垣の築地と黒塗りの木柵をめぐらし正面に観音開きの門戸のついた厳めしい八束郡役所が本社前の一畑百貨店の位置にあった。西隣には村役場のような産牛場があり、さらに西には木造の松江市役所があった。周辺の民家ではまだヤリ戸やしとみ戸がつかわれていた」という状況だった。

（３）一県一紙へ

- ・経営難にあえぐ山陰新聞に、東京に本社を持つ読売新聞から買収の手が延びてきたのは昭和 14 年秋のこと、買収交渉は 14 年末に決着。読売が買収したといっても山陰新聞は読売本社とは別法人で、新聞は従前のままだった。
- ・一方松陽新報にも、昭和 15 年 10 月、読売新聞からの松陽新報買収の申し入れに係る緊急会議が開かれた。「もともと読売新聞の山陰進出の標的は当時発行部数三千部の山陰新聞ではなく、その倍以上の八千部を持つ松陽新報の買収だった」のである。「幹部たちは郷土紙はできることなら郷土人の手で存続したい」と思い、田部朋之（県連合青年団長、このとき 34 歳）に打診を行ったところ、田部から引き受けてもいいとの返事があった。各種手続きを終えて公表されたのは、11 月 3 日であった。
- ・その後戦時下の言論統制による一県一紙方針で両新聞が合併し、「島根新聞」が誕生したのは昭和 17 年 1 月 1 日のことであった。

2. 両新聞の発行・保存状況

（１）発行状況

上記社史の中で、

- ・「山陰新聞は印刷も悪く、都会地の広告主が一県一紙を選んで広告を出すとすれば、必ず松陽が選ばれた」とか、
- ・「もともと読売新聞の山陰進出の標的は当時発行部数三千部の山陰新聞ではなく、その倍以上の八千部を持つ松陽新報の買収だった」との記述がある。

（２）明治期における新聞の保存状況

島根県立図書館に保存されている山陰新聞、松陽新報の状況は、

- ・山陰新聞 明治 15 年の創刊以来ほぼマイクロ化され、閲覧が可能
- ・松陽新報 明治 34 年の創刊以来マイクロ化されているものもあるが、欠号が多数

という状況になっている。従って、当時の新聞情報としては、専ら山陰新聞に頼らざるを得ない実態にある。

3. 明治期における竹島関連情報

- （１）これまでの明治期における新聞の竹島関連情報は、資料として現在確認されている山陰新聞の記事を中心として調査・研究がなされている。

このことは、島根県における竹島研究の第一人者である田村清三郎の「竹島の新研究」に山陰新聞の記事が引用されていること、そして田村の残した資料集にも山陰新聞の筆写資料しか残されていないことから明らかである。

- （２）この度、こうした背景の中で、奥原碧雲が竹島に関する松陽新報記事の切抜帳（以下「碧雲切抜帖」という。）を作成し、現在まで伝えられていることが明らかとなったことは、当時の状況を読み解く上で、新たな貴重な資料を提供するものである。

4. 碧雲切抜帖に関する調査、分析

島根県立大学松江キャンパス図書館に保管されてきた碧雲切抜帖（写し）は、書籍等、草稿等とともに、平成 10 年に碧雲の三男である奥原秀夫氏から島根県立島根女子短期大学に寄贈されたものであるが、未公開の資料で、かつ、現在まで余り知られていない松陽新報の記事を中心としており、碧雲切抜帖を調査、分析するに当たっては、次のような手順が必要となる。

（１）記事の登載新聞、日付の確認

まず、碧雲切抜帖は関連記事のみのスクラップであるため（切抜帖には、別に日付、登載新聞についての一覧表が添付されている）、松陽新報登載の記事であるかどうか、また記事登載日などについて、県立図書館所蔵の松陽新報記事との照合、確認を行っていく必要がある。

（２）記事内容等についての比較

碧雲切抜帖にある松陽新報記事について、これまで知られていた田村資料・山陰新聞記事との比較を行っていく必要がある。

（３）明治 39 年の島根県竹島調査団（以下「竹島調査団」という。）の関係資料との比較検討

竹島調査団については、これまで知られていた

- ・碧雲著『竹島及鬱陵島』
 - ・東文輔隠岐島司の竹島調査復命書
 - ・田村資料にまとめられている山陰新聞記事
- に加え、今回、新たに
- ・碧雲切抜帖にある松陽新報記事

が相当量見つかったため、これら資料の内容の比較検討を行っていく必要がある。

5. 記事の登載新聞、日付の確認

（１）宍道町庄司家資料

- ・島根県立図書館における明治期における松陽新報の保存は、極めて少ない。そうした中で、松陽新報を相当程度まとめて所蔵されていた松江市宍道町の庄司家の資料が新たに見つかったのは貴重であった。
- ・平成 27 年 2 月 22 日に開催された「竹島の日十周年記念式典」において、「明治 38 年 2 月 22 日竹島が島根県所属となったことや明治 39 年の竹島・鬱陵島への島根県調査団の行動等に関する記事を提供いただいた。初めて山陰新聞以外の新聞でも、島根県の竹島所管が報じられていたことがわかり、竹島に関する研究の新たな資料となった」として、資料の寄贈者である庄司武久氏に知事から感謝状が贈呈されている。
- ・庄司家資料にある松陽新報は、

明治 36 年	1 部	明治 37 年	9 部
明治 38 年	1 月 16 部	明治 39 年	1 月 =
	2 月 14 部 ①		2 月 8 部
	3 月 7 部		3 月 11 部 ③
	4 月 1 部		4 月 13 部 ④

5 月	=	5 月	26 部	②
6 月	3 部	6 月	22 部	⑦
7 月	6 部	7 月	18 部	
8 月	8 部			
9 月	1 部			
10 月	16 部			
11 月	6 部			
12 月	=			

・ 庄司家資料の特徴は、明治 38 年と 39 年に集中していること、月によって相当保存数に差があること、39 年の前半は保存度が高いことなどが挙げられる（注；丸数字は、竹島関連記事の数）。

・ 竹島関連の主な記事は、

- M38. 2. 24 「本縣新所管島竹島」
- 7. 14 「竹島渡航協議」
- 8. 7 「竹島視察決定」「竹嶋視察行程」
- M39. 3. 6 「竹島行」
- 3. 10 「竹島行」
- 3. 14 「竹島渡航」
- 4. 14 「鬱陵島見聞記（一）」
- 4. 15 「鬱陵島見聞記（二）」
- 4. 17 「鬱陵島見聞記（四）」
- 4. 18 「鬱陵島見聞記（五）」
- 5. 23 「竹島行会」
- 5. 24 「竹島會」
- 6. 7 「竹島記の編纂」
- 6. 13 「竹島領土編入沿革（一）」
- 6. 14 「竹島領土編入沿革（二）」
- 6. 15 「道洞の鬱島衙門と渡航者一行（写真付き）」
- 6. 19 「竹島領土編入沿革（三）」
- 6. 20 「竹島領土編入沿革（四）」
- 6. 27 「鬱陵島三本立の奇勝」

・ 竹島関連の記事について、庄司家資料には欠号が多い月もあるので単純な比較はできないが、明治 38 年及び 39 年について山陰新聞と比較すると、

①同趣旨の記事

- M38. 2. 24 「本縣新所管島竹島」
- 7. 14 「竹島渡航協議」
- 8. 7 「竹島視察行程」
- M39. 3. 11 「竹島行決定」
- 5. 23 「竹島行会」
- 6. 7 「竹島記の編纂」

②庄司家資料（松陽新報）だけに掲載

- M39. 3. 6 「竹島行」
- 4. 14 「鬱陵島見聞記（一）」
- 4. 15 「鬱陵島見聞記（二）」
- 4. 17 「鬱陵島見聞記（四）」
- 4. 18 「鬱陵島見聞記（五）」
- 5. 24 「山陰勝景写真募集」
- 6. 13 「竹島領土編入沿革（一）」
- 6. 14 「竹島領土編入沿革（二）」
- 6. 15 「道洞の鬱島衙門と渡航者一行（写真付き）」
- 6. 19 「竹島領土編入沿革（三）」
- 6. 20 「竹島領土編入沿革（四）」
- 6. 27 「鬱陵島三本立の奇勝」

③山陰新聞だけに掲載

- M38. 6. 6 「竹島の視察」
- 6. 24 「竹島海驢胤の消息」
- 7. 14 「竹島視察員に就て」
- 8. 22 「松永知事の竹島視察」
- 8. 23 「県庁内放養の海鹿」
- 9. 30 「韓国竹島の漁業」
- 10. 3 「竹島探検の事」
- M39. 3. 21 「竹島渡航者一行」
- 3. 24 「竹島渡航延期」
- 3. 28 「竹島一行消息」
- 4. 1 「竹島土産」
- 4. 3 「竹島渡航日記（1）」
- 4. 6 「竹島渡航日記（2）」
- 4. 8 「竹島渡航日記（3）」
- 4. 10 「竹島渡航日記（4）」
- 4. 12 「竹島渡航日記（5）」
- 4. 18 「鬱陵島の話」
- 4. 22 「鬱陵島の話」

- ・ これまでに判明していた記事と比較すると、全体的な情報量としては山陰新聞の方が竹島関連記事が多いように思われる。特に、明治 38 年の松永知事の竹島視察関連記事や明治 39 年の竹島調査団の関連記事は山陰新聞の方が詳細である。
- ・ 一方、庄司家資料（松陽新報）の方は、「鬱陵島見聞記」「竹島領土編入沿革」などレポート的な記事が多く、その内容も詳しい。また特に、M39. 6. 15「道洞の鬱島衙門と渡航者一行」は写真付きであり、資料価値が高い。

（２）碧雲切抜帖と庄司家資料との照合

- ・ 碧雲切抜帖は、明治 35 年から昭和 4 年までの 18 冊の写しが現存している（オリジ

ナルの状況は、現時点では不明）。

その中で、竹島関連の切抜は、32 件（第一部資料 2 参照）存在している。

切抜帖 NO. 4 (M38. 3～M38. 10) 6 件

切抜帖 NO. 5 (M39. 1～M39. 6) 2 件

切抜帖 NO. 6 (M39. 3～M39. 12) 24 件

・ これら 32 件の記事について、庄司家資料との照合の結果、

M39. 4. 14「鬱陵島見聞記（一）」

M39. 4. 15「鬱陵島見聞記（二）」＊切抜帖には日付なし

M39. 4. 17「鬱陵島見聞記（四）」

M39. 4. 18「鬱陵島見聞記（五）」＊切抜帖には日付なし

M39. 6. 19「竹島領土編入沿革（三）」

M39. 6. 20「竹島領土編入沿革（四）」

については、基本的に日付及び内容が同一であり、碧雲切抜帖はその多くが松陽新報の記事の切抜きと確認できる。

6. 奥原碧雲と碧雲切抜帖

（1）奥原碧雲について

・ 切抜帖を遺した奥原碧雲については、広く郷土教育に尽力した教育者として知られていた。

＊明治百年島根の百傑（昭和 43 年 10 月 23 日発行島根県教育委員会）

「明治 27 年島根県尋常師範学校を卒業して、三刀屋村尋常高等小学校訓導を振り出しに、教育者としての道を歩む。明治 29 年郷里の岡本尋常小学校に転任、その後村内にあった三つの小学校の統合に尽力し、統合後の秋鹿村尋常高等小学校の校長となり、学校経営や教科研究に常に卓見をもって努力した。その後、八束郡教育の指導、女子教育の振興、社会教育など 34 年の長きにわたり教育の進展に寄与し、本県教育界に大きな足跡を残した。こうした教育上の業績に対し、大正 3 年 2 月 11 日、文部大臣より小学校教育功績状を授与された。また、地元有志により昭和 12 年秋鹿村小学校校庭に銅像が建立（昭和 27 年に再建）された。」

・ また、文化人としての顔も併せ持っていた。

＊明治百年島根の百傑

「多芸多趣味の人で、特に文才に長じ、多くの著書を世におくり、また新聞雑誌などにも論説・紀行・随筆・詩歌の類を数え切れないほど寄稿している。

主な著書として、『島根県名勝誌』『竹島及鬱陵島』『八束美譚』『島根県遊覧案内』『八束郡名勝誌』『八束郡秋鹿村誌』『全山陰誌』『八束郡誌』『隠岐島誌』など」

＊島根県歴史人物辞典（平成 9 年 11 月 25 日発行山陰中央新報社）

「文才に秀で、『文庫』『明星』などに短歌・新体詩・紀行文が登載。明治 35 年新詩社出雲支部を設け、歌会「しのめ会」を結成。地方文芸誌『ミチシホ』『銀鈴』や地方紙にも精力的に発表、明治 30 年代の山陰文壇を代表する詩文

家となった。

明治 39 年竹島を視察し、『竹島及鬱陵島』を著して竹島研究に先鞭をつけて以来、郷土の地理・歴史の調査研究にも力を注ぎ、大著『八束郡誌』をはじめ『島根県名勝誌』『八束郡秋鹿村誌』『島根めぐり』など多数の著作をなした。
(寺本喜徳) 」

- ・このように碧雲（本名は福市、碧雲は号。明治 6 年（1873）4 月 1 日、秋鹿郡岡本村（現松江市岡本町）に生まれる）は、教育者、文筆家、歌人として幅広い分野で活躍した人物として紹介されている。

（２）碧雲と新聞について

- ・新聞との関係については、明治 38 年から 39 年にかけての紙面を見ると、山陰新聞には碧雲の投稿は見当たらないが、松陽新報については、庄司家資料により節目節目で投稿していることがわかる。

例えば、M37. 11. 3 「国運発展の歌 碧雲」 ＊歌の投稿（七面）

M38. 10. 8 「清韻（しのめ會） 碧雲」 ＊歌の投稿（一面）

末尾に（以上四首はじめて雑誌銀鈴に接して）

M38. 11. 3 「出雲の開拓 奥原碧雲」 ＊1 頁 7 段にわたる投稿（六面）

末尾に（出雲民族史論の一節、未定稿）

M39. 2. 11 「神武の東征と日本民族の融合」

＊紀元節の日、一面 1 頁を飾る大論文

M39. 4. 23 「小学校児童用の唱歌『日本海大海戦』を出版」 ＊記事

こうした密接な関係もあり、碧雲は松陽新報を中心とする新聞記事の切り抜きを始めたのではなかろうか。

（３）碧雲切抜帖について

- ・碧雲切抜帖には、竹島関連記事のほか、次のような分野の記事が見られる。

切抜帖No.1 (M35)	月山懷古
切抜帖No.2 (M36)	隠岐の見聞 橋本商業学校長の朝鮮旅行
切抜帖No.3 (M36. 12～38. 1)	隠岐國の闘牛 朝鮮の日本に対する歴史的政策
切抜帖No.4 (M38. 3～同 10)	日本海海戦に関する記事 西藏探検家故能海寛氏 間宮海峡の発見者ハ誰 間宮林蔵東韃行程考
切抜帖No.5 (M39. 1～同 6)	隠岐島後の一揆譚
切抜帖No.6 (M39. 3～同 12)	満韓通信（碧雲）
切抜帖No.7 (M40. 3～41. 5)	東宮殿下の行啓 史的研究隠岐紀行
切抜帖No.8 (M42～43)	ドッサリ（島より）

切抜帖No.9 (M43.11～45.6)	億岐洲巡り 新人國記隱岐雜感
切抜帖No.10 (T2～3)	教育功勞者選獎 (碧雲) 日獨戦争
切抜帖No.11 (T3～4)	隱岐騷擾に関する史料 (碧雲) 御大札奉祝唱歌 (碧雲) 乃木大将一家遺髮塔 (善光寺)
切抜帖No.12 (T5)	
切抜帖No.13 (T6～7)	歴代の知事さん 東宮殿下の行啓
切抜帖No.14 (T7～9)	西比利亜視察 (碧雲) 西比利亜通信 (碧雲)
切抜帖No.15 (T9～11)	
切抜帖No.16 (T12)	隱岐の名勝史跡
切抜帖No.17 (T15～S3)	隱岐情調
切抜帖No.18 (S3～S4)	

- ・ 以上のような記事からは、碧雲が地誌的な分野に関心を持っていることが窺われる。特に、東アジア全体への関心は強く、満韓通信となる視察 (碧雲)、西比利亜通信となる視察 (碧雲) を行っている。また、隱岐への関心も強く、後の『隱岐島誌』 (昭和 8 年) として結実する。

こうした碧雲の特性が、明治 39 年の竹島調査団への参加と、その報告を引き受け、『竹島及鬱陵島』 (明治 40 年 5 月 8 日発行) を著すことにつながったと推察される。

- ・ なお、竹島調査団の団長を務めた島根縣事務官神西由太郎は、『竹島及鬱陵島』の序文に、「編者奥原君は、筆を載せて同行せし一人なり、今般之か復命書等を参酌し、茲に『竹島及鬱陵島』を編纂公にせらる」と記している。

この編集を行った碧雲は、その冒頭の「凡例」の中で、

「一、本島の材料は、余か、余春、竹島視察員一行に加はりて、親しく踏査せしもの、及び、視察員の復命書により、加ふるに、隱岐島廳の文書、新竹島経営者中井養次郎氏 (マ) の談話等を参酌して編纂せり。

一、本書の資料蒐集並に出版につきては、視察員の一人中島善夫氏に負う処多し。ここに特記して、その厚意を謝す。」と記している。

また、その末尾の「本書出版につきて」の中では、

「本書、稿成りしは、昨年 (筆者注 ; 明治 39 年) 五月なりき。当時、二三材料の未だ調査中に属するものありて、これを待ちつつありし中に、神西事務官は、実業視察として、韓国に渡航せられ、次いて、編者、また、満韓旅行の途に上り、八月下旬帰国して、稿本整理の任に当たるや、たまたま、神西事務官、長野縣に転任せられ、出版のこと、大に遅延するに至りぬ。云々」と、発行に至るまでの経緯を語っている。

7. 碧雲切抜帖の特徴と新たな知見

(1) 碧雲切抜帖の特徴

- ・これまでに判明していた竹島関連の新聞記事は、新聞の保存状況も反映し、先に触れたように「全体的な情報量として山陰新聞の方が竹島関連記事が多く、特に明治 38 年の松永知事の竹島視察や明治 39 年の竹島調査団の関連記事は山陰新聞の方が詳細」という状況であった。
- ・碧雲切抜帖は、これまで明らかでなかった松陽新報の記事を中心とするものであり、かつ、その内容は質量ともに充実しており、明治期における竹島認識に新たな調査、研究材料を提供するものである。
- ・特に韓国側には「島根縣が秘密裏に竹島の編入を行った」との主張もあり、この度の碧雲切抜帖を含む一連の碧雲旧蔵資料（主に書籍等、草稿等、新聞記事等に大別される）は、その多くが竹島が明治 38 年に島根県に編入された直後のものであり、県民の「竹島」認識の定着化と関心に大きな役割を果たしたものと考えられる。

(2) 新たな知見

碧雲切抜帖において、新たな知見が得られた点は、特に次の三点である。

1) 松永知事の竹島視察談

- ・これまで明治期に竹島を調査した際の報告としては、明治 39 年 3 月の竹島調査団の報告『竹島及鬱陵島』が最も知られているが、他に東文輔隠岐島司の復命書、田村資料にまとめられている山陰新聞記事が存在する。
- ・松永知事が明治 38 年 8 月に急遽竹島を視察したことは知られていたが、その視察状況については、これまで明らかでなかった。この碧雲切抜帖により、松永知事が視察直後に、「松永知事は縣會議事堂に於て竹島視察談を為せり聴集は縣廳を始め市内官公衛吏員、縣立学校教員、市内紳士、婦人等百十数名にして談話は二時間以上に渉り」と、縣廳で報告会を行っていたことが判明した。

2) 新聞に掲載された初めての竹島全景写真

- ・新聞における写真について

「新聞に見る山陰の世相百年」（山陰中央新報社）によれば、「明治前期の新聞は、当然のことだが現代の新聞とかなり感じが違う。まず写真が全然ない。写真が載った最初の山陰新聞は明治 24 年 4 月 15 日付けで新任の篠崎五郎知事の肖像。しかし一般化するのには明治 40 年代以降である。もちろんまだ保存写真で、ニュース写真ではない」と。

一方、松陽新報については、「創刊号は現在のとおりプランケット版 10 ページ。写真はまだない」と。

- ・山陰新聞について

県立図書館保管の山陰新聞について調査したところ、明治 38 年から 39 年当時の紙面には、竹島関連の写真は見当たらない。

- ・松陽新報について

一方、松陽新報については、庄司家資料によれば、明治39年5月24日付けの新聞社告で「山陰勝景写真募集」として「廣く山陰の名勝写真を募集し、審査の上優秀なものを本紙に掲げて読者の清覧に供せんと欲す」と、名勝写真を募集した。

山陰勝景（二）が、6月13日付けで「出雲大社大鳥居」
山陰勝景（三）が、6月16日付けで「米子沖中海より大山」
山陰勝景（四）が、6月18日付けで「能義郡清水寺」
山陰勝景（五）が、6月20日付けで「竹島全景」
山陰勝景（七）が、6月24日付けで「医王山一畑薬師」
山陰勝景（九）が、6月29日付けで「安濃郡羽根東村立神巖附近の絶壁」
山陰勝景（十）が、7月1日付けで「浮浪山鰐淵寺根本中堂」
山陰勝景（十一）が、7月2日付けで「出雲大社」
山陰勝景（十二）が、7月4日付けで「日の岬灯台」
山陰勝景（十四）が、7月11日付けで「大森の五百羅漢」
山陰勝景（十五）が、7月13日付けで「石州宅野村韓島」
山陰勝景（十七）が、7月17日付けで「石州宅野村観音崎」
山陰勝景（十八）が、7月19日付けで「境港全景」
山陰勝景（十九）が、7月21日付けで「鰐淵寺山内羅漢橋」
山陰勝景（二十）が、7月23日付けで「岩龍寺の瀑布」
山陰勝景（廿一）が、7月25日付けで「松江八景の一 袖師が浦」

と、陸続と松陽新報紙上で紹介されている。

- ・庄司家資料の中では、竹島については、上記のように6月20日付けで山陰勝景（五）「竹島全景」として紹介されているほか、明治39年6月15日付けの「道洞の鬱島衙門と渡航者一行」なる記事が竹島調査団の写真付き記事として掲載されている。
- ・なお、山陰勝景については、別資料が存在する。

竹島調査団に同行した写真家・大野政助が撮影し、その子孫が島根大学舩杉力修教授に託した写真集である。

基本的には、松陽新報に掲載された山陰勝景の写真と照合・確認できるが、庄司家資料では欠号となっている写真も存在する。それが、

山陰勝景（一）「竹島の観音岩と洞窟」（大野政助氏撮影）

「竹島二大岩島の中峽を北方より撮影せし写真にして中央なるが観音岩右方の大岩が乙島左方が甲島なり」

山陰勝景（六）「玉造温泉」

山陰勝景（八）「米子城山」である。

- ・新聞に掲載された初めての竹島全景写真について

次の理由から、山陰勝景（一）「竹島の観音岩と洞窟」が島根県内の新聞に掲載された初めての竹島全景写真であったと考えられる。

一、山陰勝景の写真は、松陽新報紙上に6月から7月にかけて順次、番号順に掲載されていることから、山陰勝景（一）がスタートであったと考えられること。

二、その掲載日付は現時点では資料が見つからないため不明であるが、前後の状況などから6月上旬ではないかと推測できること。

社告「山陰勝景写真募集」に、「夏季は天然と人との関係を最も親密ならしめ、（略）乃ち此期に於て、一は隠れたる名勝を紹介する為め、若しくは忘れられたる佳景の記憶を喚起する為め、（略）廣く山陰の名勝写真を募集し、審査の上優秀のものを本紙に掲げて読者の清覧に供せんと欲す」とあり、夏季の始まりである 6 月、そして竹島調査団がこの年 3 月に初めて調査を行い写真も撮影した、隠れたる名勝「竹島」からスタートしたのではないだろうか。

3) 初めての竹島特派員による現地レポート

①竹島調査団への新聞記者の同行について

- ・吉田行精の名は、奥原碧雲の『竹島及鬱陵島』に、渡航者一行の一人としての姓名が「松陽新報記者 吉田行精」と記されている。また、同書に掲載された隠岐島廳玄関にて大野写真師が撮影した竹島視察員一行なる集合写真に、その姿を残している。

また、明治 39 年 6 月 15 日付け松陽新報の「道洞の鬱島衙門と渡航者一行」として掲載された記事中の写真にも（吉田本紙記者）として紹介されている。

- ・竹島調査団への新聞記者の同行については、山陰新聞によれば次のようになる。

M39. 3. 11 竹島行決定

3. 14 竹島視察の事

「本社も之れか案内を受けたり」

3. 16 竹島渡航案内者

「案内を受けしは左の如く △新聞社」

そして、山陰新聞に調査団の視察内容が記事として掲載されるのは、明治 39 年 4 月 1 日からで、

M39. 4. 1 竹島土産

4. 3 竹島渡航日記（一） □旅行者某生

4. 6 竹島渡航日記（二） □旅行者某生

4. 8 竹島渡航日記（三） □旅行者某生

4. 10 竹島渡航日記（四） □旅行者某生

4. 12 竹島渡航日記（五） □旅行者某生

4. 17 鬱陵島の話 □渡航者某生

4. 18 鬱陵島の話 □渡航者某生

4. 22 鬱陵島の話 □渡航者某生

とあるが、これらの記事を誰が書いたかは不明である。『竹島及鬱陵島』の渡航者一行に山陰新聞記者の名前がないことから、山陰新聞は記者の派遣はせず、渡航者の誰かがこれらの記事を書き送ったものと思われる。

- ・一方、松陽新報については、庄司家資料によれば、記者の派遣に関する記事は見当たらない（新聞そのものの欠号も多い）が、「鬱陵島見聞記」など竹島調査団の活動を伝えるいくつかの記事に派遣記者と思われる署名が記されていることがわかっていた。

②同行記者による現地レポートについて

・今回判明した碧雲切抜帖には、松陽新報に掲載された記事として、今まで知られていない竹島調査団の渡航状況、竹島の現況、鬱陵島の状況が詳細に、かつリアルタイムで、現地発の記事として紹介されている。

M39. 3	「隠岐より（一）」	■吉田生	
M39. 3	「隠岐より（二）」	*欠号	
M39. 3	「隠岐より（三）」	■吉田生	
M39. 3	「隠岐より（四）」	■吉田生	
	「竹島視察の経過」		
	「竹島の海驢（一）」	■特派記者	
	「竹島の海驢（二）」		
	「竹島の海驢（三）」		
	「竹島の話（一）」		
	「竹島の話（二）」		
	「竹島の話（三）」	■特派記者	
M39. 3	「蹴波記（一）」	■春風萬里生	
	「蹴波記（二）」	■春風萬里生	
	「蹴波記（三）」	■春風萬里生	
	「蹴波記（四）」	■春風萬里生	
	「蹴波記（五）」	■春風萬里生	
	「蹴波記（六）」	■春風萬里生	
	「蹴波記（七）」	■春風萬里生	
	「蹴波記（八）」	■春風萬里生	
M39. 4. 14	「鬱陵島見聞記（一）」	■渡航記者	庄司家資料 4. 14
	「鬱陵島見聞記（二）」	■渡航記者	同 4. 15
M39. 4. 16	「鬱陵島見聞記（三）」	■渡航記者	
M39. 4. 17	「鬱陵島見聞記（四）」	■渡航記者	庄司家資料 4. 17
	「鬱陵島見聞記（五）」	■渡航記者	同 4. 18
	「鬱陵島の森林の現況」		
	「竹島領土編入沿革（一）」	*欠号	庄司家資料 6. 13
	「竹島領土編入沿革（二）」	*欠号	同 6. 14
M39. 6. 19	「竹島領土編入沿革（三）」		同 6. 19
M39. 6. 20	「竹島領土編入沿革（四）」		同 6. 20

・これらの竹島調査関連の連載記事のうち、「隠岐より（一）」には、欄外に「明治三十九年三月松陽」と手書きされている。また記事中には、「二十三日夜西郷港山田屋旅館にて 吉田生」との書き出しがあり、調査団に同行した吉田記者が記したことは明らかである。

「竹島の海驢（一）」については、掲載日付の記載はないが、末尾に（特派記者）との署名があるので、吉田記者による記事である。

「竹島の話（三）」の末尾には、（この項終り特派記者）との署名があるので、この連載も、掲載日付の記載はないものの、吉田記者による記事である。

「蹴波記（一）」には、記事中に「三十九年三月」と手書きされている。また記事は「愈隠岐を發して本文に入るに際し「隠岐より」の編を閉ち改題してこの旅行の委曲を収めんとす 春風萬里生」との書き出しから始まる。さらに、「蹴波記（六）」の末尾に（本島に関する地誌的記録に至りては則に書く處の「鬱陵島見聞記」に譲る）との記載があるので、この連載も吉田記者の手によるものと思われる。

「鬱陵島見聞記（一）」からの連載は、（渡航記者）の署名記事であり、吉田記者が記したものである。

③他の竹島関連記事について

- ・その後の「鬱陵島の森林の現況」は、末尾に（岡縣技手談）とあり、竹島調査団とともに行動した林業関係の専門家であった島根縣の岡技手（島根縣内務部第四課岡金之助）に吉田記者が取材したものと思われる。
- ・「竹島領土編入沿革」の連載については、筆者の記載、あるいは筆者を推測させるような記載は見当たらず、「竹島領土編入沿革（四）」の末尾に（終）とあるのみである。ただ、その記載内容には、竹島調査団の一員であった中井養三郎から聞いたと思われる事実が多く見られ、竹島調査団の行程中に、中井から編入までの経緯を直接詳細に聞いた奥原碧雲の筆になるものと推測できる。

④同行記者吉田行精について

- ・「山陰中央新報社 120 年史」によれば、前身の一つである松陽新報は、明治 34 年 11 月 3 日初代社主である岡崎運兵衛により創刊された。明治十年代以降、松江で三回の新聞発刊に参画しながら、いずれも志を得なかった岡崎運兵衛が、満を持して創刊にこぎつけたもの（社屋は京橋川沿い）であった。殿町の現山陰中央ビルの位置に、明治 42 年 4 月に松陽新報社の新社屋が完成した。松陽新報社は日露戦争中から急速に発展、明治 40 年の決算で相当の純利益を上げ、岡崎が「それはよかった。新聞社も手狭になっている。これで新しい社屋を建てよう」と即断したもの。

相見繁一（香雨）は古美術研究の権威で琳派研究の第一人者として著名だが、若いとき松陽新報の記者として活躍した。その後、明治 40 年に美術書専門の出版社に移った。昭和 19 年 3 月、東京で空襲に遭い、松江市奥谷町の真光寺に疎開。同寺住職吉田行精（暁星）は松陽創刊の頃からの記者。相見とは顔なじみで 36 年ぶりの再会だった。吉田は風呂敷に法衣を包んで出社、新聞社から法要に駆けつけたという逸話の持ち主で、松陽退社後、山陰新聞に移って二年間、編集長をつとめた。昭和 25 年亡くなった、とある。

- ・また、「新聞に見る山陰の世相百年」によれば、松陽新報は三たび新聞事業を企て、三度ともその志を得なかった岡崎運兵衛、総選挙に第一回と二回は当選したものの 27 年の第三回総選挙以来四回続けて落選し、続いて立つにはその立場を選挙民に強力に訴える手段を持ちたかった。明治の新聞はそういう新聞であった。こうして誕生したのが松陽新報である。明治 34 年 11 月 3 日、当時の天長節（天皇誕生日）を選んで創刊された。同紙も山陰中央新報の前身の一つである。記者にはのち主筆

となった井原大之助（雪江）、吉田行精（暁星）、山田金太郎、溝江銀太郎らがいた、とある。

創刊当時の社屋は岡崎の別荘環翠園にほど近い元日銀松江支店付近の侍屋敷。現山陰中央ビル付近に自前の社屋を構えたのは明治 42 年 4 月のことである。政友会系の山陰新聞に対して松陽新報は創刊当初からこれに対抗する旗色を鮮明にし、やがて政友会、民政党の二大政党の対立そのままに、昭和 17 年、合併して島根新聞となるまで約 40 年間、島根県では山陰、松陽の二紙並立競合時代が続く。

- ・ このように吉田行精（暁星）は、松陽新報草創期に同社の記者として活躍し、その後山陰新聞の編集長も務めたことが記されている。と同時に、松江市奥谷町の真光寺の住職も務めていたことがわかる。

＊ 吉田行精（暁星）

浄土真宗真光寺（松江市奥谷町）第 13 代住職。先代因成（いんじょう）の四男。明治 12 年 3 月 13 日生、昭和 25 年 10 月 6 日没（享年 71 才）。住職名は「ぎょうしょう」。因成は北堀小学校の 2 代目の校長。行精は明治 42 年に住職となる。竹島視察は 27 歳の時。

「変わり者だったらしい。松陽新報時代に時々仕事を抜けて法要に出かけ、法事のお菓子を土産に配ったとの話もある。戦争中も最後まで「戦争反対」や、バケツリレーを見て「そんなことをしてもつまらん」などと言ったりしていたようだ。背の低い、細長い顔立ちだった（視察の際の写真は雰囲気があっている）。

跡継ぎがなく、親戚の子を養子に迎え、寺を継がせた。代替わりの際に、それまでのいろいろな資料を「処分してくれ」と遺言したらしい。また自分でもいろんな資料を家の庭で自分で焼いていたようだ。ということで、寺には行精関係の資料や写真は残っていない。行精が竹島に行ったことは初めて聞いたし、新聞記事も初めてだ。全くの初耳だ。」

（第 15 代住職吉田史章氏の話）

第三部 碧雲切抜帖を追って；完結編

－ オリジナル版の発掘 －

（令和 6 年 1 0 月）

1. はじめに

- ・令和 5 年 7 月に取りまとめた小論（第二部「碧雲切抜帖を追って －「竹島」に関する明治期の新聞報道－」）においては、
「碧雲切抜帖は、明治 35 年から昭和 4 年までの 18 冊の写しが現存している（オリジナルの状況は、現時点では不明）」と記した。
- ・その後、奥原家にオリジナル版の所在の確認をお願いしていたところ、幸運にも、昨年 9 月初めに、碧雲の三男秀夫氏の孫に当たる中西良幸氏及び二男国雄氏の孫に当たる奥原徹氏のご理解とご協力をいただき、奥原家における資料調査を行うことができた。
- ・その際に、松江市が平成 27 年 6 月に奥原家に提出した「奥原家から借用資料一覧」を中西氏から提供いただいた。その一覧の中に、「奥原碧雲が切り抜いた新聞切り抜き帳（明治～大正期。73 点）3 箱に収納」との記述があった。

2. 資料の所在確認

- ・碧雲切抜帖オリジナル版の所在を確認するため、松江市松江城・史料調査課の協力を得て、次のように資料調査を行った。

第 1 回 令和 5 年 9 月 6 日

第 2 回 令和 5 年 9 月 11 日

第 3 回 令和 5 年 10 月 17 日

- ・第 1 回の資料調査において、該当の資料 3 箱と碧雲切抜帖のオリジナル版の存在を確認した。

これまでの奥原家に係る資料調査は、資料 3 の調査経過の通り行われ、ここに最終的にオリジナル版が確認できた。

- ・しかしながら、当該 3 箱には、先に確認した県立大学の複写版 18 冊に比して、55 冊の切抜帖とその他関連資料が収納されていることが判明した。

3 回にわたる資料調査により、収納されていた 55 冊の切抜帖の内容を確認した結果、次の通り県大複写版とオリジナル版との差異が明らかとなった。

- ・概要を記すと、

	県大複写版	オリジナル版
冊数	全18冊	全55冊
時期	明治35年～昭和4年	明治35年～昭和59年
差異	・大正期までは、ほぼ同じ ・オリジナル版については、昭和期に入ると、長男奥原潔氏関連の記事（1－20）、二男奥原国雄氏関連の記事（1－21以降）が見られるようになる。特に、二男国雄氏が関心を寄せた信州、郷土人形関連の切り抜き帳が9冊見られる。 ・また昭和7年の（1－53）には、奥原秀夫蔵の記載が見られる。	

- ・なお、竹島関連の切り抜きについては、県大複写版とオリジナル版は同じ記事であることが確認できた。ただ、県大複写版においては、コピーの不具合により解読ができない箇所が一部あったが、オリジナル版により解読可能となり、問題が解消された。

(資料3) 奥原家資料の調査経過

項 目	歌人関連	郷土誌 関連	竹島関連	書籍	草稿	切抜帖
平成5年頃 島根女子短期大学寺本教授が奥原家を調査 碧雲切抜帖をコピー	調査					コピー・返却
平成10年 奥原秀夫氏が寺本教授に寄贈	寄贈	寄贈		寄贈	寄贈	(コピー)
平成18年 島根県竹島問題研究会が奥原家を訪問 その後 奥原秀夫氏から島根県に寄贈 (平成25年秀夫氏死亡)			調査 立志伝外			
平成26年 松江市史料編纂室から島根県に提供			提供			
平成27年 秀夫氏の親族から松江市が資料借用	資料	資料				原本
令和3年5月 (筆者による)島根県立大学調査				碧雲旧蔵資料を確認		
令和5年9月 (筆者による)奥原家調査 (同)松江市松江城・史料調査課調査			調査			原本を確認

3. 碧雲切抜帖オリジナル版により判明した事実

(1) 日付情報の特定

- ・切抜帖には、一部に新聞日付を付したスクラップもあるものの、多くのスクラップには日付情報が付されていない。
- ・日付の特定については、切抜帖に付されている手書きの目次、スクラップに付されている手書きの日付、庄司家資料との照合などにより行った。県大複写版では、どこまでが碧雲記載の情報か判然としなかったが、オリジナル版により日付等に関する情報の確認が可能となった。

(2) 新たな事実の判明

- ・県大複写版によると、松永知事の「竹島視察談」の冒頭部分に、
「昨日午後一時過ぎより縣會議事堂に於て松永知事は竹島視察談を為せり聴集は縣廳を始め市内官公衙吏員、縣立学校教員、市内紳士、婦人等百十数名にして談話は二時間本に就て一々説明を為したるが大に聴者の興味を惹起したるものありき」と、下線部分に意味不明な箇所があったが、
- ・オリジナル版により、
「昨日午後一時過ぎより縣會議事堂に於て松永知事は竹島視察談を為せり聴集は縣廳を始め市内官公衙吏員、縣立学校教員、市内紳士、婦人等百十数名にして談話は二時間以上に渉り地図及び持帰りたる標本に就て一々説明を為したるが大に聴者の興味を惹起したるものありき」と、文意が明らかとなった。
- ・これは、県大複写版の作業途中に、スクラップの端の部分が織り込まれてしまったままで複写されたためと考えられる。

(3) その他

- ・「切抜帖」台紙の仕様

明治三十四年五月廿三日四版 実価金四十銭

編集兼発行者 東京市日本橋区四丁目五番地 和田 □□

発行所 東京市日本橋区四丁目五番地 春陽堂

- ・この当時の「四十銭」は。

三菱 UFJ 信託銀行コラムの「違うものさしで考えてみると 1 円の価値は変わってきます。当時の給料をもとにして考えてみましょう。明治時代は小学校の教員の初任給が 1 ヶ月で 8～9 円だったといわれています。現在の初任給はおよそ 20 万円程度であることを考えると、1 円は 2 万円もの価値があったとも考えられます。」を参考にと、現在の 1 万円近くとなる。

碧雲は、東京発行のかなり高価な切抜帖を購入し利用していたものと思われる。

4. いくつかの謎に迫る

(1) 『観聴随筆』にまつわる謎

1) 『観聴随筆』の異本の確認

- ・第一部で触れたように、この度の奥原家調査の端緒となった『観聴随筆』は、現大田市波根町の加藤三右衛門が、江戸時代の万治元(1658)年から享保 12(1727)年までの出来事を日記風に遺した記録で、

□奥原碧雲の『竹島及鬱陵島』に、「加藤某の記せる観聴随筆によれば、享保 8 (1723) 年 6 月 21 日、大坂町奉行北條安房守、鈴木飛騨守の与力同心多勢来りて、石州安濃郡羽根東村嘉右衛、邑智郡粕淵村庄右衛門、同吾郷村傳右衛門を搦め捕へ去る、これ七年前竹島に渡りて、唐人の貨物を密かに買ひ取りたる罪によりてなりと見ゆ」とある。

■一方、田村清三郎の『島根県竹島の新研究』（昭和 40 年 11 月発行）には、碧雲の記述を引用しつつも、「この事件は、奥原碧雲の引用した観聴随筆の異本（寧ろ原本）である加藤三右衛門著の観聴随筆一名石見国安濃羽根東村覚書第二・三巻に、次のようにあることを正確としなければならないが、この当時、竹島渡海が禁制であることが石見地方においても周知せられていたことと、同時に竹島渡海が事実上行われていたことを示すものといえよう」とし、『観聴随筆』の記述「七年以前酉年ニ当国へ来ル唐船ノ荷物」を正確としている。

- ・なお、同じく田村清三郎による演習資料『竹島問題の研究』（昭和 30 年 5 月）には、上記の課題について「そのいずれを正しとするかは更に研究を要する」としており、碧雲が参照したと思われる『観聴随筆』の異本の確認が課題となっていた。

2) 新たな資料の発見

- ・この度の奥原家の調査（令和 5 年 9 月 3 日）により、田村清三郎の手書きガリ版刷りの資料「竹島及鬱陵島」と「竹島問題の研究」が見つかった。
- ・「竹島及鬱陵島」には、「原本の一部を省略した。部数を限り昭和 28 年 7 月 7 日これを印刷した。 島根県広報文書課」との記載がある。

- ・この資料の中に、上述奥原碧雲の『竹島及鬱陵島』の「これ七年前竹島に渡りて、唐人の貨物を密かに買ひ取りたる罪によりてなりと見ゆ」と波線が付され、欄外に赤字で【観聴随筆によれば韓船の来航なり】との記載がなされている。
- ・一方、「竹島問題の研究」は、昭和 30 年 5 月に島根県総務部広報文書課県政資料主任田村清三郎が演習資料として作成したもので、冊子の間に「島根農科大学補導厚生部 厚生課長 田村清三郎」との名刺が挟まれていた。
- ・田村清三郎の島根農科大学勤務は昭和 32 年 6 月から 34 年 7 月までであり、この間に、竹島関連の資料調査、特に『観聴随筆』の異本確認のため、奥原家を訪問し三男秀夫氏と面談したものと思われる。

＊島根農科大学は、昭和 40 年に国立移管され、島根大学農学部に。

3) 調査結果

以上の経過から、田村清三郎が問題提起していた『観聴随筆』にまつわる謎は、田村自身の奥原家調査により「異本なし」との確認を得て、昭和 40 年 10 月に発行した『島根県竹島の新研究』においては、大田市羽根東村沖の抜け荷事件は、竹島渡海ではなく、異国船の来航によるものと判断したと考えられる。

(2) 島根県による竹島調査日程を巡る動き

1) 竹島調査の企図

- ・明治 38 年 2 月 22 日の竹島の島根県編入を受け、島根県は新たな領土に対する「行政権の行使」として、編入直後の早い段階から、県による竹島調査を企図したことが窺われる。

2) 「行政権の行使」の態様

島根県が竹島の編入以後講じてきた行政権の行使は、次のようになる。

- ・ M38. 2. 22 県から隠岐島庁に対する指令
「爾今本県所属隠岐島司ノ所管ト定メラレ候条此旨心得ヘシ」
- ・ 4. 14 県は漁業調整規則を改正し、海驢猟を許可漁業に
- ・ 5. 3 県から隠岐島庁に対する「竹島ノ面積ヲ調査シ開申」を訓令
- ・ 5. 17 隠岐島司から竹島面積之件上申書を提出
- ・ 5. 17 県は、この上申によって竹島を官有地台帳に登録
- ・ 6. 5 県は、竹島漁猟合資会社に対し海驢漁業を許可
- ・ 7. 22 海軍仮設望楼の建設
- ・ 8. 19 島根県知事が随員 3 名と竹島視察を実施
＊「一行ハ、松永知事、佐藤警務長、藤田、大塚、ベ四人なり」
- ・ M39. 3 竹島調査団が第二隠岐丸にて、竹島・鬱陵島を調査
- ・ M39 以降 県は、竹島全島を官有地として海驢猟業者に貸与し使用料を徴収
＊明治 39 年 7 月 2 日付、県は「官有地借用之件許可候」

3) 海驢漁業問題が決着してから竹島調査の具体化

- ・しかし、島根県によるこの竹島調査が具体的に動き出したのは、新聞記事や『竹島一件資料』から、明治 38 年 6 月頃のことと思われる。
- ・これは、竹島の領土編入のきっかけとなった竹島での海驢漁業を巡る問題を解決

することを最優先し、それが決着した後、竹島調査の準備が始まったものと考えられる。

●この海驢漁業を巡る動きは、次のようになる。

【島根県竹島の新研究】

- ・ M38. 2. 26 中井養三郎が許可願を申請したのを皮切りに、3月から5月にかけて、多くの漁業者が許可願を申請
- ・ M38. 3. 7 竹島出漁願ノ義ニ付内申 隠岐島司 東文輔 → 知事宛
- ・ M38. 4. 11 堀内務部長から東隠岐島司に対し意見徴収
- ・ M38. 4. 14 県が漁業取締規則を改正「竹島の海驢漁業を許可漁業に」
- ・ M38. 5. 6 東隠岐島司から堀第三部長に対し回答
- ・ M38. 5. 10 堀第三部長から東隠岐島司に対し方針伝達
「四名の共同出願ニアラサレハ許可セサルコトニ内定相成候」
- ・ M38. 5. 22 東隠岐島司から堀第三部長に対し「共同漁業願書」を進達
- ・ M38. 6. 5 知事「海驢漁業の許可」

【新聞記事(山陰)】

- ・ M38. 5. 14 「竹島の海獺猟」
「読者も知れる如く竹島は（略）這は西郷の中井米次郎氏が一昨年始めて渡航海獺の集合地なることを発見せしも海図に洩れたるを遺憾とし中央政府に稟申する等大に斡旋の労を執りし結果帝国の領土とすることに決定し去る二月廿二日の縣告示を以て本縣の管轄に帰せしものなる（略）今は同氏の外に三人の競争者を生じたるを以て其向にては右四人の外には可か（きょか）を與へず四人も亦共同して獵せしめん方針なりといへり」
- ・ M38. 5. 28 「漁場区紛紜」
「神西事務官一行は去る19日以来隠岐島廳に於て竹島漁業志願者及都万村専用漁業区に付ての関係者を集め協議を遂げ（略）竹島及都万は既に決定したる」

●海驢漁業問題が決着してから、竹島調査の具体化が進む。

【新聞記事(山陰)】

- ・ M38. 6. 6 「竹島の視察」
「此の島に本県知事は近々渡航視察する筈にて隠岐より西八十五海里もあることとて鬱陵島へ寄泊する予定なり」
- ・ M38. 7. 14 「絵葉書通信 品川漁翁」
「遙かに聞く所に依れば県知事等が渡航して其地形を視察するといふことであるが是れは県としても政府としても調査せねばならぬことで亦世界に之を報道することも必要であろうと思ふ（略）」

【竹島一件資料】（島根県竹島資料室保管）

- ・ M38. 6. 17 書簡 小谷村長 → 横山島庁書記官
「竹島旅行ノ件、小生ハ是非便乗ヲ許サレ度、尚又岡田久三郎、藤田順正之二氏漁業上直接之関係有之候処、視察ノ為メ便乗希望申出候」
- ・ M38. 6. 23 海士郡海士村大字崎 渡辺新太郎 → 隠岐島司 東文輔
「今回竹島行視察之為メ各村ヨリ有志者派遣相成候趣、就テハ小生モ其一行ニ加リ度候」

- ・ M38. 6. 24 知夫郡浦郷村役場 → 隠岐島庁庶務係

「過般竹島視察ノ為メ御来島相成候際、便乗者宅名申込置候処、尚本村真野哲太郎ハ同島ニ於ケル漁業上ニ関スル調査ノ目的ヲ以テ渡島ノ為メ、便乗相致度旨申出候処、聞ク処ニ依レバ該島ニ於ケル漁業ハ本村漁業ト密接ニ関係アル趣ニ付、可成便乗許可相成様御取計相成度、此段及照会候也」

- ・ M38. 6. 24 知夫郡黒木村長 岩佐久一郎 → 隠岐島庁書記 長田和加次

「過日出府ノ節本村カラハ二名便乗ノ儀御依頼置候処、本村ニ於テ同島ニ関係者多々有之ヲ以テ、惣数五名便乗相成候様御取計被下度」

●この時期における関係者の動向をまとめると、次のようになる。

事 項	松永知事	佐藤警務長	神西事務官	東隠岐島司	備考
M38.2.22 編入告示		3.4 本縣着任			
4.14 規則改正			5.4 本縣着任		
4/11～5/22 漁業調整	5/10 上京 ↓		* 事務官	5/10	
5/28～ 日本海海戦	↓	5/28	5/18 ↓ 隠岐巡視	↓ 神戸 ↓ 広島	
6.5 漁業許可	6/2 帰松	～5/30 縣廳大多忙	5/30	↓ 6/5	
	6/18 ↓ 山縣次官随行		6.11 第三部長		
	6/27 ↓ 石見視察				
	7/5 帰松	7/4頃～7/7 石州巡閲			
7.14 渡航船協議	7中～8初 韓国調査報告		7.15 境港打合		
8.5 決定 (竹島行は第二隠岐丸 8/16朝境港抜錨)	8.5 竹島打合		7/23 上京 ↓ ↓ ↓		7.28 暴風雨
8.8 第二隠岐丸試運転 (3ヶ月修繕後)			↓ 8/13 帰松		8.9 暴風雨
8.15 竹島渡航延期 8/18～20 知事竹島視察	(視察) 京都丸便乗	(視察随員)			8.16～17 台風

M39.3 竹島調査団 派遣			8.30 神西村視察 (調査団長) 第二隠岐丸	(調査団員)	
-------------------	--	--	-----------------------------------	--------	--

4) 明治 38 年竹島調査の経過

この明治 38 年夏の竹島調査は、県の事情、隠岐汽船の事情、気象状況が複雑に絡み合い、次のような経過をたどったことが分かる。

- ① 島根県の事情としては、竹島の海驢漁業に係る問題を解決することが当時の最優先課題であったこと。
 - ・最終的に、6 月 5 日付けで中井養三郎ほかの共同漁業とすることで許可がなされ、その後、視察同行者の募集やチャーター船の手配など竹島調査の具体的な準備が進められていく。
 - ・翌 39 年の竹島調査団長となる神西第三部長は、38 年 5 月の赴任早々、隠岐巡視に旅立ち、海驢漁業を巡る調整や、日本海海戦に遭遇することになる。その後 7 月に境港に赴き竹島調査船の打合せを行うなどの調整を行っているが、その直後に「重要要務を帯び」て上京し、8 月中旬まで不在となる。
 - ・この間、具体的な準備を進めたのが、8 月 5 日に「竹島行の件につき打合を為すため縣廳に來訪した隠岐汽船会社長魚山幸市氏に松永知事とともに面会し、その後急遽実現した知事の竹島視察に随行した「藤田縣属」と思われる。
- ② 竹島調査団のチャーター船は、明治 38 年及び翌 39 年とも、隠岐汽船が運航する「第二隠岐丸」であり、その事情も調査日程に影響を与えた。
 - ・第二隠岐丸は総噸数 228 噸の木船で、隠岐國四郡町村連合会が建造し、明治 28 年 10 月 1 日から隠岐航路に就航（隠岐汽船が当初借用・大正 8 年に購入し、運航）していたもので、明治 38 年当時は長期の大修繕に入っていた。
 - ・県と隠岐汽船との協議により、この大修繕を終えた第二隠岐丸を竹島調査団のチャーター船と決定し、8 月 8 日に馬潟周辺で試運転を行い、その後 13 日に隠岐航路を運航し、16 日出発の竹島渡航に備えていた。
 - ・なお、第二隠岐丸は翌 39 年 3 月の竹島調査の際に、無事竹島・鬱陵島に赴き、その役目を果たしている。
- ③ この明治 38 年の夏は、台風の襲来が相次ぐなど、「今年の土用は近年稀れなる不良時候にて雨にあらねば風、風にあらねば陰曇にて」という極めて不安定な気象状況であった。
 - ・最終的に、第二隠岐丸による竹島渡航の期日とされた 8 月 16 日は、天候悪化（台風の襲来）により、延期を余儀なくされた。
- ④ 竹島調査団が竹島渡航の延期を余儀なくされた直後の 8 月 18 日に、松永知事など数人が急遽海軍御用船京都丸に便船を得て竹島視察を実施した。

一方、延期となった竹島調査団は、翌明治 39 年 3 月に神西第三部長を団長に、各分野の専門家を含め 45 人により、念願の竹島調査に赴いた。

(3) 急遽実現した知事一行の竹島視察の謎

1) 知事視察の経緯

- ・ 廣海海運所有の京都丸は、明治 23 年にイギリス製の最新鋭の汽船を購入したもので、外洋航海をはじめ多くの航路に就航した、当時の廣海海運が誇るエース級の汽船であった。また、御用船として運航されることも多く、日清戦争時には乃木将軍を台湾まで輸送したこともあった。
- ・ 日露戦争の際にも御用船として徴用されており、兵員、糧食を運ぶ輸送船として運航されていたものと思われる。
- ・ 日本海海戦後の明治 38 年 8 月に、松永知事が台風の襲来という天候悪化の中で竹島視察を模索していた時に、何らかの理由で美保関に入港してきた御用船京都丸に便船を得て、竹島への一泊二日の視察が実行できたのはまさに偶然であった。

松永知事は、松陽新報「竹島視察談」で「十八日偶然の機会に依り、某汽船に便乗し竹島に渡航することを得たり、全日一行は美保関に赴き汽船を待合せしが天候の爲め一時出航を見合すに至らんとせしも交渉の結果、全夜九時出帆」と語り、また「恰も五月二十七八日の大海戦あり、渺たる一孤島竹島は光榮ある歴史を有するに至り、非常の有名となり其視察計画も非常の人気となりしも、船舶の都合悪くして好機を逸し漸く準備なりて去十六日出発せんとするに当り、天候不良となり当分延期するに至りしが、幸にして偶然の好機会あり便乗を勧められしを以て余等一行は先づ探險的に渡航したる次第なり」と、その経緯を語っている。

- ・ この京都丸が美保関に寄港した理由と、松永知事一行が乗船し竹島視察を行うことができた経緯については、当時の公文書や新聞記事などに記録がなく、その間の経緯については全く不明であった。

2) 新たな資料の判明

- ・ この経緯に関し、最近、「美保神社 日記」（美保神社社務所蔵）に、次のような記録が残されていることが判明した。

「八月十八日 晴

- 一 十一時頃知事来関ノ報ニ接し神殿ノ敷設例ノ如し
- 一 午後一時知事・警部長来関依テ宮司旅館ヲ訪問 同三時知事・警部長上殿参拝アリ
- 一 夕方竹島渡航出発ニ付宮司見送り 」

この記述により、松永知事一行が明治 38 年 8 月 18 日に、美保神社に参拝後、竹島渡航に出発したことが明らかとなった。

- ・ また、便乗できた理由について、一説には、海軍の東郷連合艦隊司令長官と松永知事が同じ薩摩出身ということで面識があり、その人脈により搭乗できたのではないかとの説がある。

その根拠として、知事視察に同行した佐藤警務長の後年の自伝に、「知事と自分とは日本海海戦後、美保関に寄港した旗艦三笠に東郷司令長官を訪問した」との記述がある。

この記述に関し、同じく「美保神社 日記」に、次の記録が残されている。

「七月二十三日 晴

- 一 十一時島根県知事警部長来関ニ付宮司 旅館ニ訪問セラル
- 一 午後二時軍艦敷島・富士・龍田・水雷母艦（日光）其他駆逐艦・水雷艇 美保湾ニ入
- 一 午後四時知事帰松（来関ハ軍艦訪問ノ為ナリト後ニソフ思ヒ合ハセラル）

佐藤警務長の「旗艦三笠を訪問」云々は記憶違いで、美保神社の日記にある通り「軍艦敷島」に東郷司令長官を表敬訪問（三笠は日本海海戦直後から佐世保港におり、当時は敷島が旗艦）したものであった。

（注）「昭和 10 年 大久保卯助氏

明治卅七年六月一日、佐世保海兵団に入団。日露の戦役に際しては戦闘艦敷島に乗組み奮闘。未曾有の此の大海戦も、皇軍の大捷となり五月卅日佐世保に入港した。旗艦三笠の入渠中は、代つて旗艦となり司令長官東郷閣下初め各幕僚が乗組まれた。猶明治卅八年八月、旗艦三笠が佐世保港内に於て不幸にも爆沈せし後は旗艦として活躍したものである」

『日露戦争三十周年記念鑑』（西部報知新聞社）

（４）海軍御用船京都丸運航の謎

1) 松永知事が 8 月 18 日に、偶然美保関に寄港した京都丸に便船を得て竹島視察に向かった事実は、知事本人が視察後に報告会で述べているところであるが、この京都丸の竹島渡航の理由については、関係者の証言や記録に残されていないため、謎となっている。一説では、当時竹島で建設が進められていた海軍望楼用務ではないかとの説もある。

2) 海軍仮設望楼の建設

海軍による仮設望楼建設の経過は、次のように記されてる。

- ・『島根県竹島の新研究』（田村清三郎）には、「明治三十八年は、軍艦橋立が来航し、七月二十二日には海軍人夫三十八名が上陸し仮設望楼の建設を行った」とある。
- ・一方、『竹島の歴史的地理学的研究』（川上健三・昭和 41 年）には、「この戦闘（筆者注；日本海海戦）によって竹島の存在は一躍世人の注目を惹くこととなったが、海軍としては、おくれればせながら急きょ同島に仮設望楼を設置することに決した。この仮設望楼の建設と関連して同年七月四日には、佐世保鎮守府司令長官は島根県知事に対してアシカ猟業者の取締まりについて要望するところがあった。県はそれをさらに隠岐島司に移牒、隠岐島司は警察署長とも協議の上、関係業者をして漁場の秩序維持の励行方を嚴重説示するところがあった。一方、海軍としては七月二十二日には海軍人夫三八名を竹島に上陸せしめて望楼の建設を行ない、八月十九日より任務を開始したが、九月には休戦となったため、十月十五日にはその撤去を決定した」とある。
- ・また、『明治 37～38 年海戦史第四部』（竹島資料室提供）によれば、「六月二十四日山本海軍大臣ハ、竹島（リヤコールド岩）ニ望楼ノ仮設ヲ命シ、之

ヲ竹島仮設望楼ト称シ、八月十九日其ノ事務ヲ開始ス（竹島視察報告ハ備考文書ニ在リ）

十月十五日平和克復シ、十九日山本海軍大臣ハ、（中略）彈埼、入道埼、高崎山、竹島、澤埼、杵築、見島、越前埼望楼ノ廃止ヲ命ス

斯テ竹島望楼ハ十月二十四日、高崎山及ヒ越前埼望楼ハ二十六日、杵築望楼ハ二十九日（中略）、何レモ撤去ヲ完了ス」

常設・仮設	望楼名	所在	通信局ト連絡スル通信器	艦船ニ対スル通信器ノ設備	起工年月日	竣工年月日	開始年月日
仮設	竹島	リヤンコルト [○] 岩	電信未成	完備	38.7.25	38.8.19	38.8.19

配員	雇人 通船
望楼手 1 下士 1 卒 2	順時 雇人 2

- ・「明治 38 年 6 月 15 日橋立艦長海軍大佐福井正義ノ提出セル竹島視察報告」によれば、

「西方ニ位置スルモノハ大ニシテ且高シ然レトモ四圍皆断崖絶壁ニシテ登攀スヘカラス（中略）東方ニ位置スルモノハ前者ヨリ稍低シト雖モ峻険ノ度少シク緩ニ且辛ウシテ登攀スルコトヲ得ヘク嶼上皿状形ノ如キ稍平坦ナル地面アリテ多少ノ土工事ヲ施セハ造営物ヲ建設シ得ヘシ」

- 3) 以上の資料から、竹島の仮設望楼は、次のような経過をたどったことがわかる。
 - ・東方に位置するやや低い島に建設することが可能、との橋立の竹島視察報告（6 月 15 日）に基づき、6 月 24 日山本海軍大臣が建設を命じた。
 - ・7 月 22 日に海軍人夫 38 人を竹島に送り、望楼の建設を行った（起工年月日は 7 月 25 日と記載）。
 - ・建設後の運用「その事務を開始した」のは、8 月 19 日（竣工及び開始年月日と記載）となる。その際、運用体制として「配員 4 名と雇人 2 名」が配置されたと思われる。
 - ・その後、「十月十五日平和克復シ、十九日山本海軍大臣ハ竹島望楼ノ廃止ヲ命ス 斯テ竹島望楼ハ十月二十四日撤去ヲ完了」した、となる。

- 4) これらの経過から、海軍御用船京都丸は、海軍用務である竹島仮設望楼の運用開始のため、所管の舞鶴鎮守府の指令を受け、望楼の運用に必要な人員、資材を竹島に輸送する目的を以て、日本海を東から航行し、8 月 18 日に美保関に来航した。そして、折良く竹島渡航を目指していた松永知事ら一行を乗船させ、同日夜 9 時竹島に向かった。翌 8 月 19 日朝 8 時竹島に到着し、必要な資材を「辛ウシテ登攀スルコトヲ得ヘシ」望楼まで運び入れるなど作業を行い、同日仮設望楼の運用を開始するという使命を果たし、同日夕刻午後 6 時に竹島を去った。そして、京都丸は「汽

船の都合に依り翌二十日午前七時頃簸川郡北濱村十六島に送って貰ひ」（知事視察談）、松永知事ら一行を下船させ、そのまま日本海を西に去ったと思われる。

なお、松永知事ら一行が海軍用務を行うため派遣された京都丸に乗船できた理由は、先にも記したように、知事の竹島視察が国の支援を得ていたことはもちろん、知事自身の人脈によるところが大きかったと思われる。こうした事情があつてか、松永知事は視察談においても京都丸のことは伏せて、「偶然の機会に依り、某汽船に便乗し」と述べるに留まったものと思われる。

（５）新聞に竹島に関する記事を寄せた人々

１）山陰新聞の記事

- ・ M38. 2. 25 「小絃」 （署名なし；ただし、コラムの筆者か）
- ・ M39. 4. 1 「竹島土産」 （署名なし）
- ・ M39. 4. 3 「竹島渡航日記（１）」 （署名；旅行者某生）
- ・ M39. 4. 6 「竹島渡航日記（２）」 （署名；旅行者某生）
- ・ M39. 4. 8 「竹島渡航日記（３）」 （署名；旅行者某生）
- ・ M39. 4. 10 「竹島渡航日記（４）」 （署名；旅行者某生）
- ・ M39. 4. 12 「竹島渡航日記（５）」 （署名；旅行者某生）
- ・ M39. 4. 17 「鬱陵島の話」 （署名；渡航者某生）
- ・ M39. 4. 18 「鬱陵島の話」 （署名；渡航者某生）
- ・ M39. 4. 22 「鬱陵島の話」 （署名；渡航者某生）

これらの記事を誰が書いたかは不明である。『竹島及鬱陵島』の渡航者一行に山陰新聞記者の名前がないことから、山陰新聞は記者の派遣はせず、渡航者の誰かがこれらの記事を書き送ったものと思われる。これらの山陰新聞に投稿した記事の内容から、投稿者に必要な条件として

- ① 竹島に関する基礎知識があること
- ② 現場の観察力とそれを表現する力、文章力があること
- ③ 時間的に取りまとめる余裕があること、が求められる。

これらの条件に当てはまるのは、管理的な立場で参加した縣廳職員や学校関係者が考えられるが、人物の特定については今後の課題としたい。

２）松陽新報同行記者吉田行精の人物像

各種文献等（参考４）を参照すると、吉田行精（暁星）は、新聞記者、仏教者、文化人として幅広く活動していたことが分かる。

新聞記者としては、松陽新報草創期に同社の記者として活躍し、その後山陰新聞の編集長も務めた。と同時に、松江市奥谷町の真光寺の住職も務めており、その頃のエピソードも残されている。松陽新報時代に、ライバル山陰新聞の五千号を記念しての投稿には新聞人としての気概が溢れている。

一方で、父である真光寺の和尚吉田因成は「出雲でも屈指の漢学者」であり、行精もそのような環境で幼少期を過ごし、漢学をはじめ文学に関する素養を身につけたと思われる。また、「文学同志会」「文学茶話会」の世話役を務めるなどの一面もあり、奥原碧雲など当時の文化人との交遊も深いものがあつた。後年、真光寺に

疎開した日本美術史の泰斗であった相見香雨が「この和尚はなかなかの学者で、しかも稀に見る文章家だ」と語っている。

また、戦中から戦後の一時期、松江に疎開してきた画家・松本竣介一家とも、竣介の父母を引き合わせたのが行精だったという縁で交流があり、今も松本家の墓は真光寺にある。

このような吉田行精記者によって、今から百二十年前、竹島編入後初めての新聞記者による竹島現地レポートが、漢文調で格調高く報じられたのであった。

（参考４）＊吉田行精にまつわる文献等

●生い立ち

□教育の繋がり

- ・北堀小学校の沿革『城北教育十年史』（城北小学校 昭和 56 年 3 月 8 日発行）
「明治 5 年に学制が頒布されるまでは私塾により教育が行われていたが、北堀地区では次のような塾があった。

奥谷	吉田因成家塾	読書指南漢学	弟子男	33 人
同	常松之茂家塾	手跡指南唐様	弟子男	95 人
同	渡部潤一家塾	読書手跡指南	弟子男	60 人
同	杉間道外家塾	手跡指南	弟子	23 人
石橋	山根柳平家塾	手跡洋算指南	弟子男	78 人 女 14 人

明治 5 年 8 月、太政官布告をもって学制が頒布されたが、松江市は当時七区に分けられていて、北堀、石橋、奥谷を第二区と称していた。明治 6 年 5 月 9 日に第十二番小学として、奥谷町桐岳寺において開校した。ところが入学生が増加したため、明治 6 年 5 月 31 日をもって第十五番小学（奥谷女児小学）を奥谷町真光寺に開校した。しかしこの学校は地区の一方に偏在しているうえに、当時は女子教育には関心がうすく、ために就学者が少数であった。そこで明治 6 年 11 月 28 日に、第十五番小学は石橋町順光寺に移転している。その後就学者が増加して校舎が狭くなったので、明治 10 年 2 月に新築願を提出し、同年 8 月に竣工、同年 9 月 5 日に北堀小学校として開校した。この学校建築は、当時県下でも一番初めであった。

＊歴代学校長

永田穂積 吉田因成 山科正興 高畑得善 渡部潤一

- ・明治 38 年 11 月 5 日「勤続祝賀式」（山陰新聞）
「三日の佳辰に際し城北学事会は北堀尋常小学校に於て同校訓導遠藤松麿氏の勤続十年祝賀会を挙行せり来賓は福岡市長村上郡長代理藤田縣属等其他一般會員卒業生現在児童等無慮六百名幹事加藤伴蔵の開会の辞に次ぎ（略）福岡市長の祝詞卒業生総代吉田行精氏の祝詞現在児童の唱歌等あり少憩祝酒を酌み午後二時散会せり」
- ・明治 39 年 8 月 29 日「慰労会」
「当市北堀尋常小学校卒業生会長吉田行精氏今回辞任に付卒業生相謀り廿六日午前母校において慰労会を開く来会者男女百五十余名新任会長星野小太郎氏の挨拶に次ぎ記念品を贈呈し後本田校長以下数番の演説講談あり散会せり」

□思い出

- ・『数藤斧三郎君略伝』（大正6年）

「君は明治4年12月24日を以て、島根縣松江市奥谷に生る。家代々藩士に列す。父を中村秀年と曰ひ、母を綾子と曰ふ。

追悼録

数藤斧三郎氏の御実家中村家の檀那寺の住職と云ふ関係で 吉田行精 』

- ・『中国経済史の開拓』（1948）

「加藤繁博士小伝 榎 一雄

加藤繁先生は、明治13年9月3日、士族内田虎次郎・セイの四男として、松江市の北郊奥谷町に生れた。先生は二歳の時、同藩の士族加藤文八・シマ夫婦の養嗣子として迎えられた。

菩提寺である真光寺の和尚吉田因成は、出雲でも屈指の漢学者であったが、先生は中学時代これに就いて十八史略や史記の訓読を受けた。因成氏の息行精氏（現存）は先生の無二の親友で、先生は早くから常にこの寺に出入された。先生の養家も実家も決して豊かではなかった。それは吉田行精氏（松江市奥谷、真光寺住職）の追憶に、この頃のことを記して、『内田家も加藤家も、松江の北の果ての寂しい奥谷町に住んでおりました。御一新後の社会の情勢の変動で、士族はいづくも同じく、激しい世波に翻弄せられ、没落の一途をたどりました。奥谷の屋敷は売られ、あちこち転々とされました。奥谷時代は（加藤君は）まだ学齢に達して居られませんでした、そのつい近所に鎮守の春日神社の森があり、よく遊びに行ったもので、御祭りの真似などして遊んだものです』とあるのによっても、略々想像がつく。

ヘルンの松江在住は明治23、4年、加藤先生11、2歳の頃である。中学校へ入ると、当時有名な教頭西田千太郎先生から英語を教わり、最も大きい感銘を受けた。しかし、中学時代の先生は、どちらかと言えば内向的で、少数の具眼の友人の他には、必ずしも人々の注目を惹く存在ではなかったようである。先生の親友吉田行精氏の記述によると、先生は中学生の頃から既に史学者たらしむる志があったようである。そして特に研究の中心として中国史を選ばれたのは、三宅雪嶺氏の議論に動かされた結果だった。」

●文化人としての交遊

- ・明治36年8月5日「文学同志会」（山陰新聞）

「予ねて同好間に企てられつつありし全会は這般其第一着手として河井咀華青戸白虹吉田暁星奈良梧月渡部穀雨の諸氏の発企により一昨日大野水亭に於て一部の集会をなせり会するもの奥原碧雲青田萍舟井原雪江平垣霜月加藤淞州松原葉桜の諸氏なりき茶菓を喫し談笑の間に決議せし事項は▲本会は夏期一回開会する事（略）▲本会には幹事三名を置き本会に関する庶務を処断せしむる事等なりき投票の結果暁星穀雨梧月の三氏幹事に当選せり」

- ・明治38年8月9日「文学茶話会」

「本日午後一時より島根倶楽部に於て青山萍舟青戸白虹岩崎翠芳奈良梧月吉田行精諸氏発起者となり文学に興味を有する同行者の茶話会を開く筈」

□『一老美術学者 相見香雨の回想』（森山時雄 昭和 60 年 6 月 18 日発行）

「日本美術史の泰斗であった相見繁一先生（1874-1970）は、号を香雨といい、松江市の出身である。先生は昭和 45 年 6 月 28 日に没した。

先生は明治 7 年 12 月、松江市魚町に生まれた。島根県尋常中学（松江中学）2 年のとき、ラフカディオ・ハーン（俗名ヘルン日本名小泉八雲）が赴任して来た。先生は珍しがって、しばしばヘルンの宅を訪れた。ヘルンの姿は、先生の脳裏から終生消えることはなかったようだ。

先生は中学を卒業するや、坪内逍遙を慕って東京専門学校（早大の前身）に進んだ。明治 33 年学業を終え、帰郷して親戚の岡崎運兵衛が創刊する松陽新報に請われて入社した。直ちに編集長になった。当時を回顧して、『ライバルの山陰新聞社と日露戦争の取材競争をやったあの頃が一番面白かった』といていた。

明治 40 年、豪華な美術本の出版で有名な審美書院の主幹、田島志一が松平家の宝物を収録に松江へ来た。先生は手伝いを頼まれた。その間、田島とすっかり懇意になり、それが機縁で翌々年の初夏（明 42）、終に審美書院に入社することになった。既に妻子のある身で、編集長の要職を一擲しての転職は賭に等しいものであった。当時の先生の動向を伝える資料として、友人の郷土史家奥原福市に宛てた興味深い書簡（明 42. 11. 25）がある。

明治、大正、昭和を通じて、おそらく先生ほど天下の名宝名器を見てきた人は少ないであろう。先生は我が国美術界の長老として、誰しも一目置く存在であった。昭和 45 年 6 月 28 日、97 歳（数え年）という長い生涯を飛鳥山房（東京都北区滝野川一ノ六 相見邸）で終えた。巨星墜つ、という感であった。

はじめて先生にお目にかかったのは、昭和 22 年の晩秋であった。先生は奥谷町真光寺の離れの二階二間を借りて、奥様と静かに暮らしていた。先生は割烹着を付けていた。着物が汚れるというので、奥様が着せたものであろう。東京で戦災に遭い、疎開先を郷里松江市の真光寺に求めたのは、住職の吉田行精がかって先生の松陽新報時代の同僚であったからである。先生は『この和尚はなかなかの学者で、しかも稀に見る文章家だ』といていた。

それからというものは、足繁く真光寺に通うようになった。先生は億劫がりもせず、いつでも快く迎えてくれた。真光寺の先生の二階座敷は東が開けており、眺めがよかった。去る年の中秋の明月に、田中老人と私は観月に招かれたことがある。嵩山から昇る満月は絶景であった。

先生は松陽新報時代に、常松クマと結婚した。クマは飯石郡赤来町の出身で、松江市の先生の親戚に当る素封家岡崎運兵衛方に行儀見習いに来ていて、先生と結ばれた。二人の間には五人の子供があった。（略）

先生は少年時代に両親を失い、親戚の岡崎家に托されて中学に通った。東京専門学校に進んだのも岡崎家の援助によるものである。先生は養育された岡崎家に対して、心から恩義を感じていた。当主の運兵衛は見識高く、地方切っつの事業家であり、かつ衆議院議員でもあった。松江城山公園には故運兵衛の功績を讃える銅像があったが、戦時中に供出されて台座のままになっていた。そ

れを昭和 38 年 11 月に至って、彼の郷土に対する貢献に鑑み、胸像が再建された。

相見家も名門であった。父君の名は文右衛門、松雨と号した。相見家は、松雨の代に明治の経済変動に対応できず、また火災に遭ったりして倒産した。先生が親戚の岡崎家に托されたのはそんな事情からである。

先生が松江市での疎開生活を切り上げて帰京したのは、昭和 26 年のまだ膚寒い 3 月 10 日であった。戦中戦後を通じて六年有余の間、辛抱強く時機の到来を待っていたことになる。駅頭での見送りは盛大であった。

○後記

私は昭和 22 年の秋初めて先生に出会い、先生の没する 45 年の 6 月まで、親身も及ばぬほどのご慈愛を賜った。先生が郷里の松江市で疎開生活をしていたのはなにしろ今から 40 年近くも前のことで、その頃にはずいぶん多くの人たちが真光寺（先生の疎開先）詣でをしていたが、今では当地でも先生のことを知っている人は殆んどいなくなってしまった。私の知っている先生は、74 歳から 97 歳までの晩年の先生である。晩年の二十余年こそは先生の生涯において最も成果を上げた時代となった。

松江市教育委員会での同僚であった詩人の田村のり子（筆者注・島根県の竹島研究の第一人者であった田村清三郎夫人）さんからは、執筆上のいろいろ有益なご助言をいただいた。 昭和 60 年 6 月 」

□『で・こらそん』（丸山勝三）

「無味庵先生

石橋町界限は、その名残のあるところで、私の好きな通りの一つでもある。土蔵や古い家並みが続く中ほどに、しだれ桜で有名な千手院があり、その一角に「カネモリ醤油」という百二十年にもなる老舗がある。

この「カネモリ醤油」の当主である森山時雄氏が、山陰では、いや日本でも有数の琳派の研究者であることを知る人は少ない。『相見香雨の回想』は、琳派に目覚め、若くして指導を仰いできた相見香雨先生との交誼から、香雨を回想しつつ琳派の中核に迫ったものであり（略）、氏の並々ならぬその博学、勉強ぶりに感嘆したものである。」

□『島根県立美術館研究紀要』（2021 第 2 号）

生誕 100 年松本竣介展記念講演会 2012.10.8

「父・俊介、母・禎子、そして松江のこと」（松本莞氏；松本竣介/次男）

「俊介は実は岩手県の出身です。小学校、中学校の頃までを岩手の盛岡で過ごし、17 歳の時に東京へ出てそれから絵の勉強をし、昭和 11 年に松本禎子、私の母と結婚します。養子として松本の家督を継いで、松本竣介を名乗ります（旧姓は佐藤）。

松本という家は、明治維新の頃まではどうも松江藩士で、私の祖父母の代で松江を離れることになります。ただ松本の墓はずっと継続して松江に残っています。現在墓は奥谷町の真光寺にお世話になっています。（中略）

松江で教鞭を執っていた松本肇（祖父）、浅田恒（祖母）をめぐり合わせた方がいます。現在私どもがお世話になっている真光寺の先々代のご住職で、吉

田行精という方です。肇とともに仲の良い親友の間柄だったそうで、この吉田行精さんも恒の父の浅田四郎の門を叩いて勉強しており、その吉田さんが浅田恒に松本肇を引き合わせたということだそうです。

松本の家は、その後京都から東京に移り、東京での生活が続きます。私の母・禎子は肇がまだ京都にいた年に次女として生まれています(1912)。(中略)

松江に疎開したのは、昭和 20 年に入って東京の大空襲、ちょうど母が臨月で、祖母・恒が多少なりとも縁の濃い松江に疎開するのがいいんじゃないか、ということになったようです。4 月に妹が松江日赤で生まれ、祖母、母、私と妹の 4 人での生活が始まりました。松江での疎開生活は 2 年足らずの期間でしかなかったのですが、子供心にはとても楽しい松江の生活しか頭には残っていません。

松江に疎開していたのは 1 年半くらいでしたが、竣介は、終戦直後から 2 ～3 回ほど混乱をかいくぐって松江に来ています。当時、宍道湖やお城が一望できた眺めのいい墓地にお墓があり(石橋町の市営墓地)、その眺望に満足げな竣介が「僕もここに入るのか」といったとか母は言っていました。その後ちょっと環境が変わり、今の真光寺さんにお世話になることになりました。」

●新聞人としての活躍

○『山陰中央新報社 120 年史』(再掲)

「松陽新報 明治 34 年 11 月 3 日創刊 初代社主 岡崎運兵衛
第 2 代社主 岡崎国臣
第 3 代社主 岡崎正臣
第 4 代社主 田部朋之

明治 34 年 11 月 3 日、山陰新聞とともに本紙の前身である松陽新報がこの日創刊された。明治十年代以降、松江で三回の新聞発刊に参画しながら、いずれも志を得なかった岡崎運兵衛が、満を持して創刊にこぎつけたもの(社屋は京橋川沿い)であった。殿町の現山陰中央ビルの位置に、明治 42 年 4 月に松陽新報社の新社屋が完成した。松陽新報社は日露戦争中から急速に発展、明治 40 年の決算で相当の純利益を上げ、岡崎が「それはよかった。新聞社も手狭になっている。これで新しい社屋を建てよう」と即断したもの。

相見繁一(香雨)は古美術研究の権威で琳派研究の第一人者として著名だが、若いとき松陽新報の記者として活躍した。明治 40 年に美術書専門の出版社に移った。昭和 19 年 3 月、東京で空襲に遭い、松江市奥谷町の真光寺に疎開。同寺住職吉田行精(暁星)は松陽創刊の頃からの記者。相見とは顔なじみで 36 年ぶりの再会だった。吉田は風呂敷に法衣を包んで出社、新聞社から法要に駆けつけたという逸話の持ち主で、松陽退社後、山陰新聞に移って二年間、編集長をつとめた。昭和 25 年亡くなった。」

・明治 35 年 5 月 31 日「第五千号発刊を祝す」(山陰新聞)

「吾人の観察によれば、新聞紙なるものは二個の方面を有す。(略)されば其の勢力の及ぼすところ普遍にして社会の全般に亘る。政法、軍事、文学、宗教、

教育、外交、通商、実業等の影響を蒙らざるはなし。業に社会を以て対象とす。新聞記者たるの職分やまたそれ重大なりといふべし。(略)あらゆる方面の知識と意見とを有せざるべからず。即あらゆる社会現象を精査報告すると同時に、自家の見解、論断、理想を発表して、之を社会公衆に訴え、以て将来採るべき進路を定むるにあり。(略)

先輩岡本君の主幹する山陰新聞が、遠大の抱負を持し、高尚なる理想を実行すべきの運命を帯びて、山紫水明の此の地に呱呱の声を上げしは、明治十五年五月のことなりき。爾来星霜を閲すること二十、号を重ねること五千、隆なりといふべし。

これ一に主幹以下記者諸氏が、卓抜なる見識を有し、高尚なる理想を立てて、着実真摯に精進せられしによる。誰か祝賀せざるものあらんや。若し夫れ、そが社会に致せし貢献に至つては、世既に定評あり。迂生豈に喋々するを要せんや。

亀田城北新緑蒼々たる寓居に於て

長風万里生

*この記事は、署名が「長風万里生」とあり、参考情報としては[亀田城北の寓居]、[山陰新聞にエールを送っている]ことが挙げられる。これらのことは、吉田行精の特徴[松陽新報の記者][松江城の北、奥谷に居住]「蹴波記に春風萬里生の署名を使用」に符合する。

*この雅号の由来について

- ・一説「李白の詩に、『宣州の謝朓の楼にて校書叔雲に餞別す』という詩があります。そのなかに、・・・長風万里秋雁を送り、これに対してもって、高楼にカン(酒へんに甘い)なるべし・・・という一節があります。中国の故事には、雁が手紙を届けたという逸話がありますから、そこから来ているのでしょうか」とある。
- ・また、「春風萬里生」については、李白の漢詩にある言葉。北大路魯山人が好んで使った。「春風萬里莊」『薩摩の文教』 「大海春風萬里生」(島津久峰；知覧領主)
- ・一説「有名な唐代の詩人・李白の漢詩」の一節。正確には、「黄鶴西樓月 長江万里情 春風三十度 空憶武昌城……と、続いています。ここから春風万里、という言葉が取られ、日本では芸術家の北大路魯山人などが好んだ」とある。

○その他情報

- ・新聞研究昭和 30 年 4 月号(日本新聞協会発行)

「初代編集長錦織弘毅のあとに政経部長井原大之助(雪江) 通信部長吉田行精(暁星) 社会部長村穂八三郎(柴舟)の三者合議制とした。」

- ・新聞総覧(大正 14 年)

社員一覧表

「 山陰新聞社 通信主任 吉田行精 」

むすびに

本レポートに記したように、奥原碧雲が遺した竹島関係資料は、書籍、草稿、新聞切抜き等多方面にわたり、かつ膨大な量に上っている。体系的な整理が望まれる。

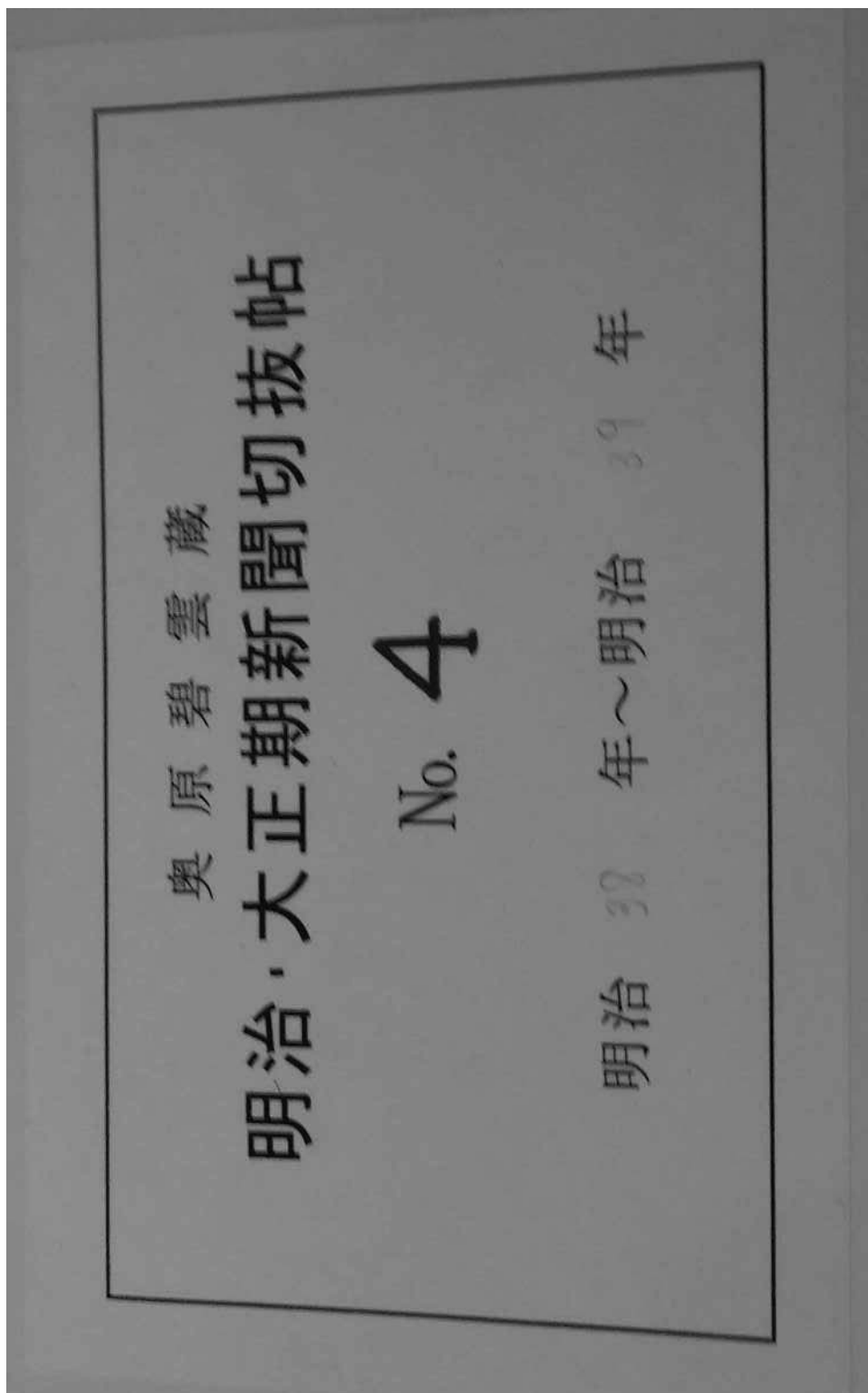
特に「碧雲切抜帖」は、これまで竹島問題を巡る調査研究の対象となったことのない、本当の意味での『新資料』であり、できるだけ早い資料化、データ化が必要と考えられる。その上で、これまでの資料との比較検討により、竹島が島根県に編入された直後の「竹島認識」が明らかになることを期待したい。

最後に、今日に至るまで、本調査にご理解とご協力をいただきました奥原家の皆様、松江市奥谷町真光寺吉田住職様、貴重な史料の閲覧を許可いただいた松江市美保関町美保神社の皆様、また調査のきっかけを示唆いただいた福田正明様（島根県議会議員・竹島領土権確立島根県議会議員連盟会長）、碧雲旧蔵資料の閲覧・複写にご配慮いただいた島根県立大学短期大学部寺本喜徳名誉教授及び島根県立大学松江キャンパス図書館の皆様、さらに調査全般にわたってアドバイスをいただいた島根大学法文学部舩杉力修教授並びに島根県竹島資料室の皆様に、心から感謝を申し上げ、むすびといたします。

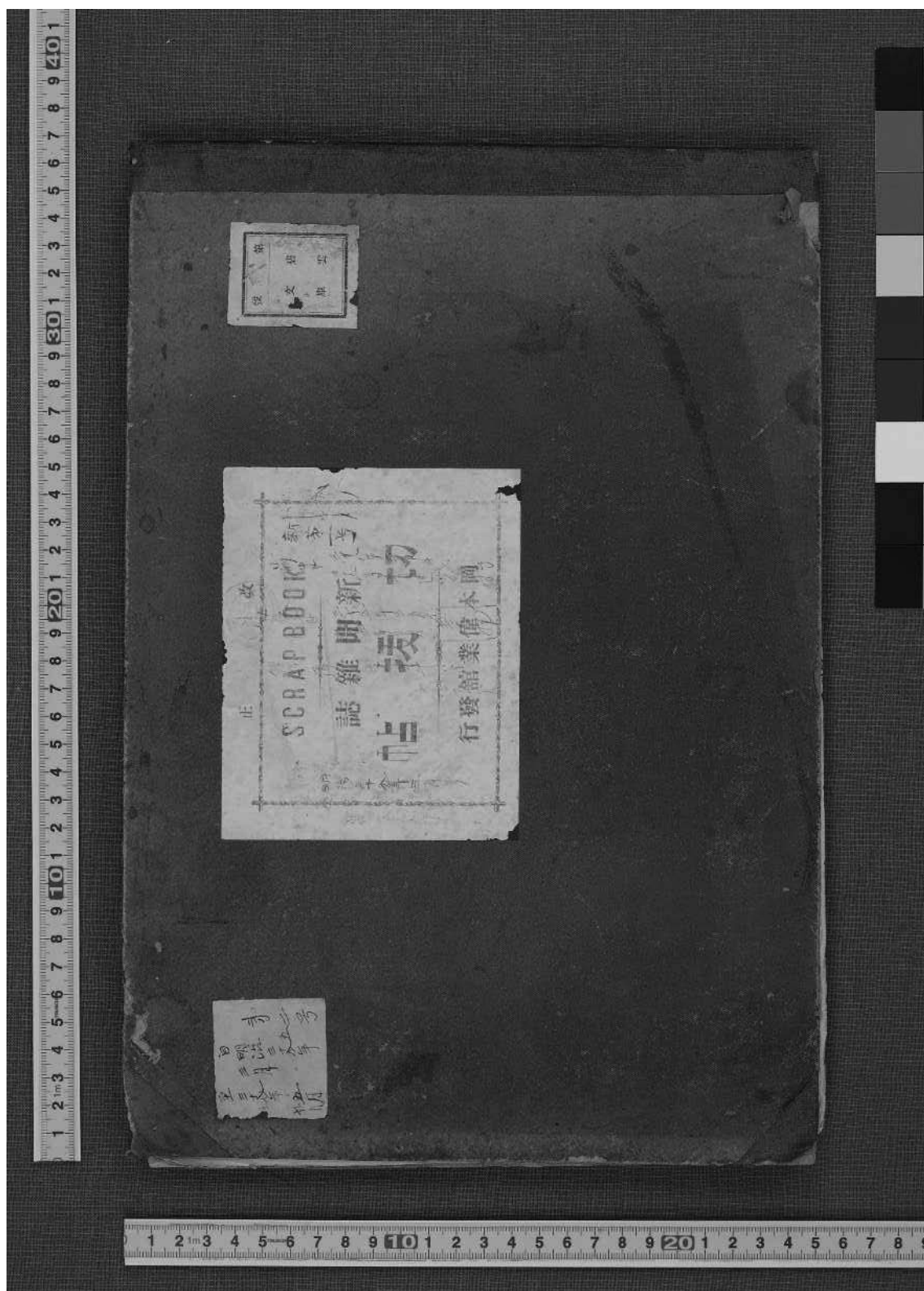
〈資料〉

『奥原碧雲藏 明治・大正期新聞切抜帖』(碧雲切抜帖) 抜粋

碧雲切抜帖(写し)の表紙 (島根県立大学松江キャンパス蔵)

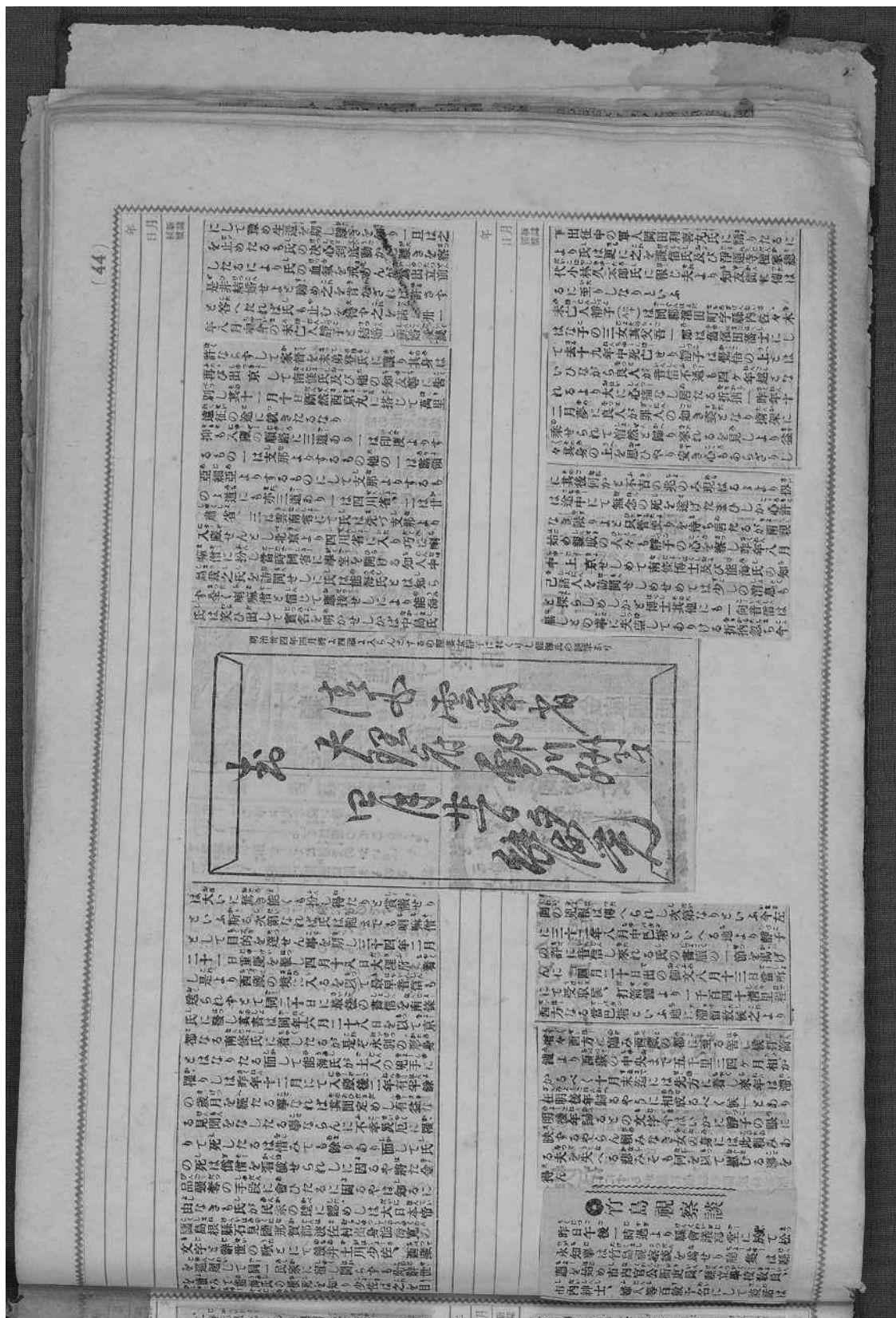


碧雲切抜帖（オリジナル）の表紙 （松江市松江城・史料調査課保管）



碧雲切抜帖（写し）の目次（島根県立大学松江キャンパス蔵）

[illegible]



年 月 日



症に從つたるより現に飼ふ畜体のものあり
 り等の事に應じたり、其種多の畜種にして
 が飼ふるものを見受けたり、大も過激者は
 居然、其種多の畜種を飼ふべし、今日に於ては
 畜種以外等々を飼ふべし、然れども畜種
 以外畜種にその島が畜種の地居なりしことを
 は諸君の職望を希望す
 片に佛國の諸用に就て一言せんに、三十九
 年之畜種は其地に輸出したるものありしも
 全く失敗なり、翌年に至りては其の諸用
 今日に至りては製菓業の進歩と畜種の
 増進とにより、今では其地用畜種の多
 増進したるもの、今は牛皮の代用となるに至り
 畜種は精製して飼料に充てるる食品を得て
 肉は食用するべく大肥料に充てらる
 油精は總に用ひるべき見ゆなり云々
 以上は種々數種間の動物に上りて牛馬を
 飼ふて飼ふしたるものならんれば、總て互相
 を應じたりべし、又人畜の關係を重んず
 近き將來に於ては、其種多の畜種あり、
 島に其種多の畜種に、是れ畜種家の精進な
 る飼養を要することとなるべし、他種多の畜種
 に於ては、其種多の畜種を重んず、飼養の生産と保
 びとを重んず、其種多の畜種を増進すること
 明記すべし云々(後)

竹島は、東南海より、
 なる遠望にして、突然に
 一個の巨巖海中に立上
 る如く、四方の空、洞然
 門なり、近うくには、波
 ひ出、國の如く二區に
 劃せざるを見る、方最
 比、戰艦の所、一

吉田生
三
松

隠岐より（一）

二十三日松陽新聞記者より

▲二十三日夜は明日の朝霧後れとはならぬと、皆々寝る終ると聞かぬ。麻ねべく用、早すれば九時頃には松陽新聞記者の人となり、夜、寒いと冷かに思ふ。明日は必す、寒さ、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、一百一、一百二、一百三、一百四、一百五、一百六、一百七、一百八、一百九、二百、二百一、二百二、二百三、二百四、二百五、二百六、二百七、二百八、二百九、三百、三百一、三百二、三百三、三百四、三百五、三百六、三百七、三百八、三百九、四百、四百一、四百二、四百三、四百四、四百五、四百六、四百七、四百八、四百九、五百、五百一、五百二、五百三、五百四、五百五、五百六、五百七、五百八、五百九、六百、六百一、六百二、六百三、六百四、六百五、六百六、六百七、六百八、六百九、七百、七百一、七百二、七百三、七百四、七百五、七百六、七百七、七百八、七百九、八百、八百一、八百二、八百三、八百四、八百五、八百六、八百七、八百八、八百九、九百、九百一、九百二、九百三、九百四、九百五、九百六、九百七、九百八、九百九、一千、一千一、一千二、一千三、一千四、一千五、一千六、一千七、一千八、一千九、二千、二千一、二千二、二千三、二千四、二千五、二千六、二千七、二千八、二千九、三千、三千一、三千二、三千三、三千四、三千五、三千六、三千七、三千八、三千九、四千、四千一、四千二、四千三、四千四、四千五、四千六、四千七、四千八、四千九、五千、五千一、五千二、五千三、五千四、五千五、五千六、五千七、五千八、五千九、六千、六千一、六千二、六千三、六千四、六千五、六千六、六千七、六千八、六千九、七千、七千一、七千二、七千三、七千四、七千五、七千六、七千七、七千八、七千九、八千、八千一、八千二、八千三、八千四、八千五、八千六、八千七

云ふ八百人の海人にて植ゑたりと云ふ

かゝる屋敷連中は眞に煙突に堪へず、御氣

西郷山田屋旅館にて 吉田主

がつて居る連中は眞に感嘆に堪へず、御氣

の事から入道などは僅に其形骸を残す
るものなりと聞かぬ

▲國產學士の君（吉田局長の名は知らず）
達より國產學士と呼べし。其由余は
達より記すべけれど、學士二字の爲めに後選
者中野々學士の詩の一節「廿歳迄吾向所慕
國產國產學士名」と示し終はりしことまで
いふべくも言ふれしやうし、讀むたれば大
方、夢の如く忘れぬ。其一節に古の歌垣の
面影の残れるものは、少くも春て飛端に向き
ひねるとはよいね。

▲國產學士又曰く、公任に自稱軍機事務協
同として罷がかり地すれ、名古屋にあり
たる所、自官署の邊にたれののどけは
あらうし、こゝには無く、たのれの名の加はら
なうし、こゝには雖かりしに初めて公任に赴任
して此地に上座しける所、金屋の人（金屋
園の？）のみ新しも身來にけりとのこ出處
ひとは道理なれど、一人のサイクリストの
群の如く出て来りしは、ちや心地悪く深
なりうと錯覚したたまふ。偉大な山の頂に
双輪を乗上りしことは朝敵前の仕事なら
んと氣知つたに違はぬ。

▲彼にて此條松立大方のサイクリストに着
くと、國產學士の技藝に未知數あれど、
現に知らざるも出来部の設けられたるよ
う又觀衆會の催されど、取つてこの學士
の胸の奥を有若かんと其美を排くる人の
出にせよ前なるにかし。

▲刺さるすしに夜は既に更けり、いかにぞ
幽明で、歸りに隨ひ國產學士の君、明日は
ある山にもある建築物を訪へければ必
ず全行をするのだとぞ、かしこまり時ぞ。

▲前に引いた二十三日夜の二つの記事
すべし、東馬の寺、陸政丸事務長池田經市
氏訪問する。

▲馬の町の御馳走れたる一節に金峰山（西
郷黨の東部を包繞せる山脈の最高）にて古
一の鳥に出來し穀物の不作にて御馳走に貢
するといふ是の時、西郷六郎公使館の山
頂に一茶石を燒きたるその煙の束に御引く
なすと云ふやになしけるなど、今尚舊きを
憶ふところぞ。詰らざるが如く出て、燃
くべき石の邊殘れるか、うを記せる記録は
更に筆して、實錄無きうと申し惜しうし。
これ等諸報あればこそは（新聞記者）

▲馬の町大詰より、文江山脈に馬頭山出て
る所の、（これに只ひと事なりし、摩訶
らた）甘藷、馬頭山、矢張り、法々木橋筋
の安永川九折にて古傳き、泡月の生れし處な
りや。口實の傳へたるにすれば泡月はあ
るべき所にあり。其地の爲め泡月が是處
ならず、誤つて此地に至りと失せ、泡月

いて抱^かひて日毎^{ひごと}池^{いけ}の邊^へに立ちて松林^{しょうりん}山國^{さんごく}
 のこゝろ、たがが妻^{つま}をうだへしては母^{はは}と思^{おも}はれ
 水^{みづ}に入り、又水^{みづ}より出^でて、亡^なき母^{はは}の姿^{すがた}にあ
 づくかれり、斯^{かく}くして後^{のち}將^{まさ}に泳^{およ}ぎて美保^{みほ}の關^{かん}に
 着^つきしが、經^へて右^{みぎ}邊^へ下^{くだ}りに召^よ出^でされたりとぞや
 、面^{おも}白^{しろ}しと思^{おも}ふまゝにこゝに賣^うきつけれ

◎竹嶋視察の經過

船客の總目録として記載せる數日の帳上より
通覽せられ、今其號を讀み、記載せしむ。而
して面白きところなし。事は明治の帳上より
進歩すべければ、御多識諸君も大抵より
出帆する如く二十三日午前五時東條清平手紙
出帆。二十五日午後三時山崎正吉、同日午後五
時出發の要なり。と測驗所及び新聞各報に於
て、天候變遷を觀に來りしが、以て返船と爲
り。翌二十四日は朝来、天候變じ急にはる
景にて午後二時頃に至り、又々返船の旨局
より通知あり。二十五日も亦同様變遷あり。
加ふることに、廿五日天候變遷を告ぐ必
ず決定すべしとの通知あり。二十六日に至り、天
候復舊せるを以て急に出帆せしむ。通報に接
し、午後四時手を初し乗出した。記者隨同停泊
に於て撮影を爲し、將に發せんとす。恰増潮
の勢あり。今明兩日の天候変合斷しとの
傳へあり。夕刻四時頃出帆せざるはよきこと
と云ふ者あり。直ちに富田増潮測候所に宛て
て電報の問合せ電報を爲す。待つこと約一時間
返電來らざらん。本誌三報より、福徳なる
意を決して遂に發す時に堪へしより返電來る
。然れども方折に待てる方より止むべく、隨船歸
來。後橋標に附け、船燈を三時半止し、上野國
報せしむ。乃ち、出帆時、午後六時餘上發開
の困難なく、二十七日午前八時竹島附近に着
す。對渡して投錨すべからず、城島に津出一
行上陸。中井兼三郎氏等の引ける船師は海難を
避し、一面を移し、以て漁夫は漁翁を爲し、各船
の調査をして上陸員は攝影士となり、午後三時
十分同島を出發せしむ。時間の都合により、下
風波を避脱し、速航することとなり、同夜九
時岡島近傍附近に着し。

神戶西務官、東京帝國衛生技術員、賀
山、浪江二醫師、中井兼三郎氏、中島嘉郎
の七名上陸。約一時間非常の困難を経て、約二
十町の海上を一時間を要し、遠隔にして郵便
文受所長片岡田方に投宿す。轉入姓名を留置
簿に記入。小舟を縫して、離水をはかり、全
港に散泊。翌二十八日午前八時一同上陸。留守
爲し、警衛及び上陸場所を訪問し、一面撮影を
爲す。是の日々は一連を通じて、約三時間記録
あり。て沿岸を觀察し、一部分の人々は島内の
祠等を爲し、午後八時、出發西郷に向ひしが、